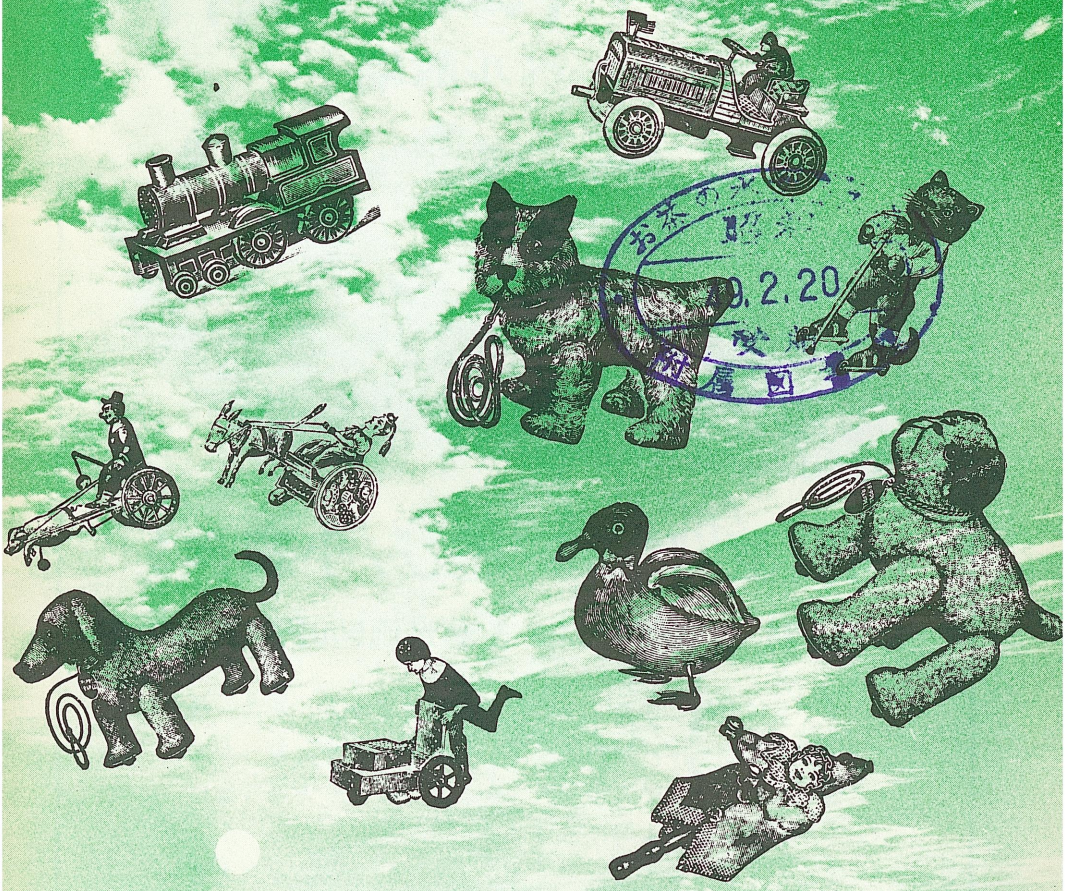
家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



お茶の水図書館
79.2.20
受入
附属図書館

3

第七十三巻　第三号　日本幼稚園協会

全6巻

豊かな保育の世界がここから始まる

# 保育カリキュラム資料

## フレーベル館編

## 春/夏/秋/冬/遊び/小事典 近刊

**B5判・136ページ・各巻定価600円(〒110円)**

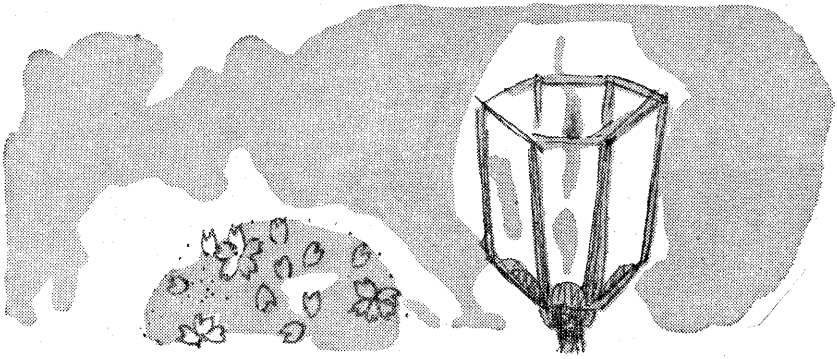
子どもは一時としてじっとしてはおりません。その一瞬一瞬を力いっぱい活動し生活しているのです。せっかく苦心して作り上げたカリキュラム表も、あっというまにくずれさることもしばしばです。
そんなとき、いつ、どこででもすぐに役立つのがこの資料集です。あしたのカリキュラムのためのヒントを集めた、あなたのための保育ハンドブックです。

●お求めは弊社代理店・支社・支店・営業所へどうぞ

株式会社 フレーベル館

# 幼児の教育

第七十三巻　第三号



# 幼児の教育　目次

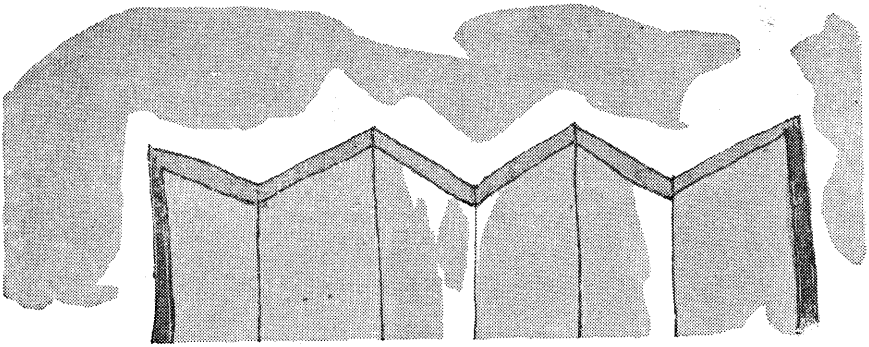
——第七十三巻　三月号——

表紙　司　修
カット　中島英子

©1974
日本幼稚園協会

家庭と幼稚園……多田鉄雄…(4)
誰のための幼児教育か……黒田成子…(8)
人間を人間として生かす仕事……坂口亮…(14)

☆家庭と幼稚園
家庭と幼稚園のあり方について……畠中徳子…(18)
家庭と幼稚園—一日入園—……竹中京子…(22)
イギリスと西ドイツの幼稚園では……八森知栄子…(24)




私の保育—入園当初—……清水エミ子…(26)
私の保育—私の子どもたち—……大崎利恵子…(30)

橋詰良一著
「家なき幼稚園の主張と実際」より（二）……(35)

子どもの生きがい……山野光映…(44)
保育者養成と児童文学……鈴木都志子…(48)

☆講演
「幼児との教育」の中で学んだこと……河辺昊…(53)
—教師も幼児と共に成長しているだろうか—

# 家庭と幼稚園

多田　鉄雄

幼稚園教育の存在を前提とするとき、家庭と幼稚園とが緊密な連絡を保っていて初めて幼児に対して教育の実があがるものだということは、あらためて述べるまでもないことである。この場合、個々面接とか、家庭訪問とか、文書の往復とか、母の会とか、保育参観とか、さらに進んで両親教育の企画とか、種々の方法があるが、それらの手段、効果、難点とかはすでにいろいろの機会にいろいろに論じつくされているのでここでは触れない。

さらに家庭と幼稚園とは幼児の教育に関して、それぞれが担当すべき役割、それぞれでなければできない役割があって、相互に相手の役割をおかすことなく、それぞれ自己の分と役割を守り、果たしていくべきであり、しかしその際なによりも相互の心からの協力が必要であることも自明の理である。

しかしこのような日常の保育の間における幼稚園ないし幼稚園教師と、それぞれの幼児の家庭ないし両親との連絡、協力ということの前に、実はより基本的な問題、すなわち本来の幼稚園の性格・役割に関して、ある程度、共通の正しい理解を両者がともに持つとともに、その幼稚園の両親一般が、その幼稚園の性格、その固有な保育方針を理解していて、そこに初めて相互の信頼が育ち、深められていくのであり、かくて相互の連絡・協力もスムーズなものになるはずである。

そのためには、まず幼稚園ないし幼稚園教師自身がこれらのことに関して、明確な見解を持っていねばならぬであろうし、一応は持っていると考えているであろう。ところが現代のように社会諸般の進展・変化の速度と規模が大きい状況にあっては、人々は従来持っていた観念、理解、見解を時に応じて、この社会諸般の進展・変化の現実に照らし合わせて再吟味する要があるのではな

いかと思われる。新入園児とその両親を迎える四月を前にして、以下に述べることが、いささかでもこのような吟味の手がかりになればと、のぞむものである。

まず本来の幼稚園の性格である。昭和二十三年に学校教育法の中で、現行の幼稚園規定が定められており、そこでは幼稚園は「幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」を目的とするものであり、この規定は現在までなんら改正されていない。それにもかかわらず、現実の幼稚園の中味は、この法律制定当時のものとは変わって来ていると見るべきであろう。その一つはここにいう「保育」とは保護・育成もしくは保護・教育 Take care and educate であり、小学校以上の学校の「……を教育すること」を目的とすると区別されて用いられていることであり、その二は近年になって幼稚園該当年齢児のうちから五歳児を取り出して、五歳児保育義務化の構想が、さらに五歳と学齢児の六歳児、七歳児とを発達段階の一つのまとまりと見る構想が具体的に考えられ始めていることである。

学校教育法が「教育」という言葉を用いずに、幼稚園は「幼児を保育すること」を目的とするとした理由は何か。幼稚園がどのような役割を果たすとき、保育しているといえるのか。また学校教育法制定の時には、幼稚園における指導の指針となるものは「保育要領」であったが、現在は「幼稚園教育要領」となっているが、ここで「保育」という言葉を用いない理由は何か。たしかに学校教育法の中では、第七十八条がいわば教育的目標をかかげているだけで、保育という言葉に含まれている保護機能については言及していない。しかし大正十五年制定の幼稚園令が用いている「保育」という言葉をここで用いている意味、および前述の学校教育法制定に際してアメリカ占領軍から同意をとりつけた「保育」の意味は考慮しておかねばならぬであろう。保育が保護機能――ここでどのような種類のこと、どの程度のことというのは別問題である――を含んでいることは、その「幼稚園令、同施行規則、同令及同令施行規則制定の要旨並に施行上の注意事項」を吟味すれば明白である。また保護機能について規定しなかったのは、終戦後の当時の実状、保育所と幼稚園との関係の未調整からそれが不可能であったとも推測される。

それゆえに学校教育法最初の幼稚園令施行規則（文部省令）では、第七十六条で「保育日数及び保育時数は、保育要領の基準により、園長が、これを定める」とあり、「保育要領」は午前八時ないし九時から午後三時まで保育する幼稚園の日課の例が提示されている。

つぎに「幼稚園に入園することのできる者は、満三歳から、小学校就学の始期に達するまでの幼児とする」とあるのは、小学校以上の学校がすべて修業年限を定めているのに対し、ここではか

かる年限は定めていない上に、満三歳からでも、極端にこじつければ就学始期の直前でも入園できると読みとれる。しかし真意はいかなものであろうか。幼稚園の保育はこの三ヵ年という期間のうちのどの時期から始まってもよいということか、それだけでなくこの三ヵ年のどの部分だけ保育をうけてもよいということか、または三歳、四歳、五歳の三年を一応は幼児の発達段階の一つのまとまりと見た上で、任意の時期の入園を認めているのか、さらにできれば三歳から、少なくとも年長児と年少児の相互作用による教育的効果が考えられているのか、以上のうち学校教育法の本来の趣旨はどこにあったとすべきであろうか。法規解釈からは「就学の始期に達するまでの幼児で満三歳以上のものの保育を行なうこととされており、その修業年限は定められておらず、したがって、その修業年限は一～三年と入園させる年齢によって差異がある」とされている。これに対して昭和二十六年の文部省通達「……さしあたり、今後幼稚園に入園を希望する幼児の取扱いについては、幼稚園教育の重要性にかんがみ、なるべく多くの幼児に、小学校入学前一年間の幼稚園教育の機会が、与えられるよう、格段の御配慮を願います」とあるのは、幼稚園を小学校への橋渡し機関ないしは五歳児優先主義といった新たな性格に変えているものといえる。

また現在はその試行がつづけられているのみで表立った動きはないが、中教審その他による五歳児義務化案、四・五歳児に始まる幼年学校構想も考えておかねばならぬ問題であろう。

いずれにしても幼稚園なるものの役割は理論的にも実際的にも単純一律のものではなく、その機能もいろいろな方法で発揮されるものであるから、右に述べたような基本的問題のほかに、それぞれの幼稚園が、あるいは地域社会の状況――たとえばその地域の多くの家庭にとっては幼児の保護を第一義的に期待する社会的・経済的条件があるとか――によって、あるいは設置者ないし園長の教育的見識――たとえば情操的方面を重視するとか、生活教育の方法原理に立つとか――によって形成している固有の性格についての再吟味ということがある。

幼稚園をこのように吟味してゆくと、おのずから、それの家庭教育との関係についての考察につながる。もともと幼稚園は家庭教育を補う機能をも持っており、戦前の前述した幼稚園令では「幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ（中略）……家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス」と規定されていたし、現行の学校教育法では「家庭教育を補う」は除かれているが、その機能が否定されたからではなく、「この語句を残すことによって、かえって家庭教育でできぬ点を遂行する幼稚園独自の機能が弱められるのを恐れた」とこの法律の立案者の一人が述懐しているとおりである。要は「補う」とは代替か補完か、積極的か消極的かである。

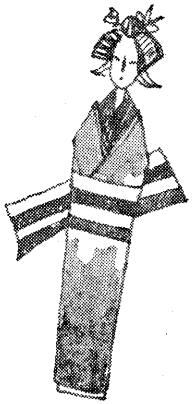
家庭とはいうまでもなく、それを構成する家族は次々と新しい世代と交替しながらも、過去から未来にわたって存続していく血縁的・運命的・生活共同体である。現実の家庭に無責任両親等々いろいろの欠陥があるものが存在しても問題は別であり、家庭が乳幼児の身体的・道徳的・精神的発達の基礎を形成する大きな力であることは人類の長い歴史を一貫している事実である。かかる家庭教育に対して幼稚園はある場合には代替的役割も果たすが、望ましい教育的環境のように、現実の家庭では不十分であり勝ちな点を補完するとともに、集団の中で、集団を通して、集団によって教育するという家庭では不可能な教育を補完するという二重の意味で幼稚園は家庭に対し積極的な役割を果たすべきであろう。

最後に「幼児に文字を教えよ」という一部の両親の要求、換言すれば「幼児の学習能力」の問題がある。たしかに、現今では多くの学齢未満の幼児が文字に関心を持っている事実が認められる。これは幼児の知能の早期成熟化によるものでなく、幼児をめぐる文化的環境の影響に由来するものと考えられるが、ともかくも「子どもの興味・関心を出発点として指導する」という原理からして、文字を教えること自体は無理なことでも間違ったことでもない。しかし問題はこの年齢の幼児にとっては、このこと以上により重要な、より適切な経験や活動が存在しないかどうか、文字の学習が、かかる経験や活動を妨げないかどうかである。次にこの文字学習を制度として採用することの適否である。子どもの発達自体にいちじるしい遅速の多様性が見られる上に、かりに生活年齢と精神年齢が一致するとして、生れ月による差異である。たとえば生れ月で八ヵ月の差は、満十歳と十歳八ヵ月では60対61の差にすぎないが、満四歳と四歳八ヵ月では6対7の差である。したがってかなり長い年月にわたる徹底した個別指導の可能性がないかぎり無理というほかはあるまい。

アメリカにおいては最近になってブルーナーの提唱した知的早教育が失敗だったとする声があがっているといわれている。西ドイツにおいては学齢を低下する意味でなくて、一九八〇年までに五歳児の義務教育実現が目指されて、目下実験中である。その事情はあらためて紹介したいと考えているが、このために作成された詳細かつ注意深い指導案を見ても、必ずしもうなずけるものといい切れないものが見受けられる。このような早教育問題に関しても家庭と幼稚園の落着いた話し合いが持たれることが望ましいことと思われる。

# 誰のための幼児教育か

黒田　成子



## はじめに

「私の幼児教育論」という仮の題を与えられたが、内容、題名とも自由にということなので、ゆがめられた現代の幼児教育について記したいと思う。無気力な団地の子ども、進学に方向づけられる子どもたちを見ると教育への視点を変えなければと反省させられる。そして重度の精薄児の存在や、幼児教育の対象である幼い乳・幼児たちの姿を通して今日もっとも欠けている問題について考えてみたいと思う。

## けんかのない園

先日卒業生の就職しているある幼稚園で一日を過ごした。S県の新興都市にあり、家庭層は住宅ローンで家を持っている人や団地の人たちがほとんどである。園児数は三百名余。狭い園庭に交代で出ては遊ぶしくみになっている。

私が訪れたその日は、業者から寄贈された子ども用の自転車六台がはじめて子どもたちの目に触れた日であった。交代で庭に出た子どもたちは、ピカピカ光るその新車をもの珍しそうに眺めていた。年少、年長児入り交って六十人ぐらいがかたまっている。これはきっと言い合いかけんかが出てくるだろうと先生たちはようすを見ている。

はじめに、ちょっとした小ぜりあいがあったが、わずかの時間であった。しばらくガヤガヤしたと思うと、六人の子どもが順々に白い運転コースをゆっくりと一回りしてくる。ある子どもはおそるおそると、ある子どもは慣れた手つきで。順番を待つ大勢の子どもの群はだんだん小さくなっていった。とうとう全員が自転

車にのり終わったが、けんからしいけんかは何一つ見られなかったので先生たちはがっかりしてしまった。毎日の生活の中で時にはくいちがいがおこり、当然けんかがおこっていいはずの時でもけんかをしない。自己主張をする子どもは数えるほどしかいない。本気で怒る子どもも少ない。体が触れあうようなつかみあいのけんかなどまだ一度も見かけないそうである。

けんかの少ない園はここばかりではない。ある園で見学者が子どもに「けんかをしないの？」ときいたところ「けんかをするとくたびれるもん」と答えた園児がいたそうだが、わかりの早い子ども、要領のいい子ども、無気力な子どもが多くなってきた近ごろは当然かもしれない。

団地に住むこうした子どもの母親がまたよく似た傾向を示している。母親たちはたとえ意見を持っていても波風をたてるような発表の仕方はしない。うっかり独自な意見をはこうものなら、村八分とやらにされるかもしれない。めんどうなかかわりあいは一切ごめんである。なるべく気の合う少数の人たちと、あるいは子どもの関係で仕方のない範囲にだけ生活圏を限っている人々も多いのではないか。

子どもは体力の面で狭い団地の生活に行動範囲が限られるだけでなく、知的面にも精神的にもかたよった生活におしこめられていく。相手はテレビとかワーク・ブックであったりする。もっと教育熱心な母親なら進学塾に連れていくだろう。こうして、小ぎれいで、意欲のない子が仕立てられていく現状。いったいこれでいいだろうか？　一生懸命で熱心なのは母親や教師や大人たちだが、子どもたちはほとんどいつも受け身的である。子どもは子どもとして夢中になったり、熱心になったり、はしゃいだり、ぶつかりあったり、子ども自身の生きがいを感じたりしなくていいのだろうか。いったい私たち大人は子どもを何だと思っているのだろうか？

## ゆがめられた幼児教育

わが国に児童憲章が制定されたのは昭和二十六年である。しかしいまだに一人一人の子どもの幸せが、その能力にかかわりなく真実に考えられているかどうかは疑問である。この近年急に脚光を浴びてきた幼児教育については、マス・コミと幼児教育周辺の関係者の間でもっともやかましく論じられている。しかし肝心の乳・幼児はおき忘れられている感がする。いったい誰のための幼児教育であろうか？　一人一人の子どもはそのユニークな個性にふさわしい教育や養護を受けているだろうか？

保育所の不足は相変わらず深刻である。一九七二年の「子ども白書」によると約二二〇万人の要保育児童に対し、入所率は五九％にすぎない。（昭和四十六年自治省調べ）すでに九〇万人以上

の子どもが放置されているという。

また産休明けから乳児を預けたい働く母親の悩みは深刻である。無認可保育所にあきがあればまだよい方である。しかし助成金の問題から病児の保育のことにいたるまで、あまりにも大きな問題が山積している。福祉政策は看板だけに終わらせてはならない。いったいこの世に生を受けてわれわれの社会にすでに存在している乳・幼児の一人一人を何と見ているのだろうか。政治の責任をとっている人々の社会観や人間観を疑問に思うものである。

一方幼児の人格を無視した営利主義の幼稚園もあとを断たない。復古調をとりあげた最近の例としては、郊外のある新設幼稚園の実例がある。入園案内に〝お子様にお誕生日の行事に園そなえつけの礼服、すなわち男の子には羽織袴(はかま)に日本刀を差し、女の子には十二単衣の正装をさせる。ご希望に応じ、写真撮影のため衣裳をお貸しする〟とあった。このような珍しい教育は誰のために考え出したものだろうか。

塾のような幼稚園も多い今日である。川端利彦著の「問題になる子」の中の資料によると、東京都の予備校的幼稚園のうち二割近くの子どもが問題をもっている。いわゆるいい子であり過ぎるため、社会的についていけない子がふえてきている。そして喘息、じんましん、頭痛、嘔吐等の症状をおこす。これらがやがて小学校へいくころ登校拒否となったり、さまざまの問題をのりこえられなくて悪化していくわけである。

また一クラスの人数の問題は依然として解決されていない。幼稚園設置基準の「四十人以下を原則とする」を都合よく解釈して、四十人が定員でそれをうわまわるのは当然のように思う感覚がすでにずれている。それでは一人一人への配慮がどうして可能になるのか。保育はどうしても指示的、一括的にかたよることになるだろう。以上は今日のゆがめられた幼児教育の一端に過ぎない。現代においては子どもはどのように考えられているのだろうか。単に国家のために役に立つ人間として大量に、早期に教育される対象なのだろうか。

## 役に立つ人間とは

児童観についてはその時代によりくりかえし歴史の中で考えられてきた。しかし、最近のようにゆがんだ社会環境の中でいためつけられている子どもの姿をみて、いったい子どもとは何かという問いをあらためてもっているこのごろである。

先日三年ほど前に私の勤めている短期大学の英文科を卒業して静岡県にある重度精薄児の施設に働いている卒業生のHさんが上京してきた。それは学校で礼拝の時に話をしてもらうためであった。

Hさんの話しぶりは特に雄弁というのではなく、もの静かで、

考え考え、自分の日常の経験を短く語ったものにすぎなかったが、私たちの心を深くとらえたものであった。

彼女の話によると、重度精薄児の知能は一生かかっても三歳の幼児の知能水準を超えることはできない。すなわち何年たっても大人にならない子どもたちである。施設で働く人たちの毎日の仕事は、満足に自分の手で食事のできない子どもたちに食事を食べさせたり、排せつの習慣がなかなかつかない彼らに、根気よくぬれたパンツをとりかえてあげて、乾いた気持ちのよい感触を一回でも多くもたせ、少しでも自分の力で身辺の生活ができるようにしてあげることであるという。

それは単に回りの人たちの手がはぶけるということではなく、彼ら自身が「自分ひとりで食事ができる」とか、「おしめがなくてすむようになる」とか、ごく当たりまえのことであっても、彼らにとっては実に大きな進歩であり、生きがいとなる。だからこそ職員たちはそうした子どもを助け、共に生きることに全力をそそぐ。またそれが自分たちの生きがいでもある。

それはこれだけ教育をしたからその何倍も役に立つ人間になって国の繁栄につながるといったようなこととはおよそ反対の考え方である。役に立つ人間とは何だろうか？ エリートコースを驀進して世の中に出て、政治・経済をにない、汚職や公害の波をくぐりぬけながらたち回れる有能な人のことをいうのだろうか。それとも能力のいかんにかかわらず、与えられた可能性を精いっぱいつかおうと努力する人のことか。それは「役に立つ人間」をどう考えるかにより、つまり一人一人の価値観により違ってくるものである。

重い知恵遅れの子は彼なりに役に立つ人である。彼らの生きるたくましい努力こそ、この世に光をもたらすものである。いわゆるこの世的な尺度の有用性は問題ではなく……子どもたちはその「存在」によって価値がある。（傍点部分は長沢嶽　著「おおぞらに向かって―重い知恵遅れの子らとともに」より）

わが国では過去から、人間を人間としてみること、人間の権利のめざめが足りなかった。そして障害をもった子どもに対しては「かわいそうに」というあわれみの意識しかなく、彼を固有の人間として見ることがなかった。同じ考え方が、力のない幼児や衰えて役に立たなくなった老人に対してなされた。幼児はまだ幼く、社会に役立たないもの、いずれ勉強をさせ、早く仕立て、準備ができたら社会の桧舞台で活躍させる。老人はすでに役目の終わった人でもう用はない。これでは社会のためという旗じるしのもとで、人間は特定の役にたたなければ意味がないことになる。人間軽視も甚だしい。特定の肩書がなくなると急に価値が薄れるように思うことと同じである。

一人一人の子どもは固有の存在をもっている。ある基準に照ら

して、これはすぐれていてあれはおとっていると比較できないものがある。しかもその子ども独特のものを伸ばすことにより、子どもはますますその子らしく成長していく。長沢氏らはそろばん勘定では成り立たない事業を、あえて知恵遅れの子どもたちのためにしている。それは「子どものうちに潜在している能力が十分引き出されることが彼の人間としての当然の権利である」からであるという。これは健康体の子どもにも同じくあてはまることではないか。幼児教育は個人の営利のためでも産業界のためでもない、その子ども自身の人間としての確立のためにあるのである。この自明のことを私たちは現代にあって実感として理解しているだろうか。

## 「思いやり」をどう生きるか

昭和四十八年の十一月二十六日の朝日新聞に「何のための一貫教育か」と題する論説が出ていた。後半のところで「……第一に考えてほしいのは、もっぱら競争原理によっている今日の学校教育を連帯の原理にもとづくものに変革するにはどうすべきかという問題である」とあり、その変革のために「企業の就職、昇進の条件、大学の格差の是正などの構造変化」と小・中・高の教育改善をあげている。さらに自主的に考え、批判力をもった行動的な人間の必要を説いている。これは幼児教育にもいえることであるが、単に主体的な人間をめざすだけでなく、さらに問題を深めると、その人間と人間同志の相互関係性ということが出てくる。日本の子どもは自己充実と共に他者との関係の中で生きる喜びを、もっと幼児期から育てられる必要がある。

最近役所関係の幼児教育指導において能力主義でなく「思いやり」の教育ということがとりあげられているともれきいて喜んでいる。しかし「思いやり」の方法は今後十分検討されなければならないことである。たとえば、もしこれらが従来の徳目主義の衣がえであるとすれば、もっと視点をかえる必要があるだろう。

「思いやり」は単なる道徳のワクぐみにとどまっていてはいきいきしさを失うと思う。もっと私たち人間一人一人が互いの人格を認め合い、相手をその人なりにフルに受け入れようとする信頼関係に立つものでなければならない。そのことにより相互関係が密になり連帯感が生まれてくる。

「ボク、テレビばっかり見ていた」とか勉強を全然していないなどと言って相手を安心させておいて実は猛勉強をして友だちを追いぬかしたりする小学生。クラスの一人が病欠すると競争者が一人減ったと喜ぶ中学生たち。こうした子どもたちには連帯感など全く思いもよらないことなのだろうか。何となくかたまり合ってばかりいて、必要な時に自分はこう思うとハッキリ言えない女児たちをよく見かける。ちょっとみると緊密なグループに見える

が、いざ何かの事がらがおきると、ほんとうはバラバラであったことがわかったりする。幼児の「思いやり」はどのように実生活の中で生きるのだろうか。

まず子どものことを考えてみたい。その子どもは、ベテラン教師の中にある年々集まってくる平均的な三歳児や四歳児ではなく、現時点の「今」を生きている○○君、または○○ちゃんである。○○君にとって幼稚園とは何か？　友だちとは？　彼の考える「思いやり」とは何だろうか？

彼は相手の区別がつくより先にまず自分について知らなければならない。自分を知ることは赤ちゃんの時から始まっている。五ヵ月ぐらいの時彼は自分の指を眺めたり、なめたり、物をとろうとして指を動かしてみたりする。成長するにつれて家族や友だちがどのように自分に反応するかによって自分というもの、また他人というものを知るようになる。

これらのことは、生活や遊びの中で子どもが自分で事物に触れたり、いろいろの人に出会ったり試行錯誤の経験をしながら遊びや学習の中で身につけていく。乳、幼児期に彼は家庭や園や友だちとつくっているそれぞれの集団の中で育つ。この時期に自分が人に受け入れられていること、必要とされていることを知ることにより安定感と自信が育てられていく。父母の間で、または保育者同志で、互に信頼し合っている関係にあること、そうした共同体の中で「思いやり」がいきいきと息づいていると、子どもは知らず知らずにそれを肌で感じ取っていく。

教師は子どもたちと共に現場の生活の中で具体的に「思いやり」の経験をもつことこそ大切である。それは「思いやり」について話すことより効果があるだろう。思いやりはとかく静的なやさしさの中にあるように思われやすい。園の飼育物にこまやかな心くばりをすることや、休んでいる友だちのことを考えたりすることなどのように。しかし、時には荒々しいけんかの中から思いがけない友情が生まれることもあろう。それも相手のことを考えるやさしさがきっかけとなったりする。また教師が子どもをつきはなして遠くから見ていることもあるだろう。「思いやり」はいろいろの形をとって現われるから私たちはそれを見いだしていかなければならない。

以上幼児教育のいくつかの断面をとりあげながら、現代社会の中で忘れられようとしている人間観の問題を考えようとした。知識や技術の調教師が流行するようでは、人がほんとうの人間として生きることとはほど遠い。何のための幼児教育か。そして誰のためか？　子ども自身を生かし、子どものための幼児教育が必要である。それは原点にもどり、人間とは何か、子どもとは何かをあらためて問い直すところから始まるのではないだろうか？

（東洋英和女学院短大）

# 人間を人間として生かす仕事

坂口　亮

どういうわけかこんな大きな題をいただいてしまいました。私は整形外科医で、乳児、幼児を相手にすることが多いので、その接触のうちに子どもの心身の発育などについては何か意見があったら書いてごらん、という思し召しと解釈しました。本誌の対象読者は児童の教育にたずさわる方がほとんどと思われますので、私は素人らしくおくせず、日ごろ思うところを書き連ねてみます。

まず私の仕事の整形外科のことですが、これはご存知のように、骨や関節・筋肉、またこれを動かす神経系などの病気を対象とする専門科目で、交通事故のような救急的のものから、赤ん坊の先天性の病気、あるいは老人の関節痛、神経痛というように広い間口を持っています。私はその中でも特に乳児の先天性股関節脱臼の治療に専念する境遇になり、毎日毎日入れかわり立ちかわり多くの子どもに接し、私なりの体験を重ねています。この病気は、単に股関節のことだけでなく、広く子どもの治療という問題で私にいろいろのことを考えさせます。

われわれが整形外科に入門するとさっそくこの病気の治療を教わります。股関節がはずれているのですからはめてやらねばならない、大腿骨の骨頭は後のおしりのほうにはずれているので、それを前方へ引き出すように引張り、ゴリゴリッと股を直角に開くとはまるのですが、助手に骨盤をおさえてもらい、かなり力を入れなくてはなりません。そこで麻酔をかける必要も出て来ます。次に、そのようにしてはめられたものは、またすぐはずれてしまいますから、しっかりと保っておかなくてはなりません。それがギプス固定です。子どもは両方の股を直角に開き切った形でがっちりと固定されました。子ども、特に小さな赤ん坊相手にこんなゴリ押しのような治療をしたらいいわけがなく、脱臼ははめることができても、大てい骨がいたんでしまいます。成長すべき軟骨の部分

が、整復の操作で傷つけられたり、何ヵ月にもわたって石膏でがんじがらめにされるためとダメになってしまうのです。こういう不都合なことはわかっていても、脱臼を治すためにはやむを得ない、そのことを恐れて何もしなければ、一生股関節脱臼のためにビッコを引いていなくてはならない、というのが伝統的な考え方で、そのために整復法や固定法が整形外科医必修の技術として新人に教育されたわけです。

小さい子ども、特に赤ん坊はただ泣くだけで物がいえないのだから、こちらから心を鬼にしてでも、やるべきことをやっておいてやらなくてはならない。とに角はずれたままにしておけば必ずビッコになり不幸な目をみるのだから……とお定まりの整復操作とがんじがらめの固定、そしてその後のマッサージ通いが続けられました。先輩の先生方の、子どものためによかれと思うその善意に対してはみじんも疑う余地はありません。現に私の先生格に当る学識豊かで人格高潔な方方も深刻に悩みながら、そのような治療に努力したのですから……。しかし――結果はあまりにみじめでした。子どもは、脱臼は治してもらっても、成長がひどくゆがめられ、結局ビッコを引く、あるいは年ごろになると痛みが起こって病院通いしなくてはならない、というような事実が続出しました。もちろんそのような方法でもうまく治る子もいました。それが妙な支えのようなものになって、昔から長い間こんな治療法が繰り返されて来たといえましょう。それにしても、いくら善意によって脱臼を治すといっても、半数以上（大体六〇パーセント）の子が治療のために傷つけられるような方法がまかり通っていてよいものでしょうか。

チェコスロバキアのパブリクという人はおもしろい方法を考え出しました。一九五七年の発表ですから、まだ二十年もたっていません。それが日本にも輸入され、今では治療法の主流になっています。この方法は、単なるつり紐に過ぎず、両あしにそれをつけて、肩にかけ、ズボンつりのようにつっておくだけのものです。あしをまっすぐに伸ばすことはできませんが、それ以外の動作なら何でもできるようになっています。子どもにとって苦痛らしき苦痛はなく、（大体小さな赤ちゃんほど、股関節を曲げた形で動かすのが好きなようです。あしを頭のほうへ持ち上げてなめたりします）そのまま好きなようにさせておきますと、大てい一～二週のうちに、はずれていた股関節がはまってしまいます。不思議なことには、そのように脱臼がひとりでに整復されると、（注意深く見ていると、ある一とき泣いたりするようです）赤ちゃんはそのほうのあしをぺたっと開いたままほとんど動かさなくなります。反対側のいいほうのあしは少しもじっとしておらず、

いろいろな芸当を見せてくれるのに、脱臼がはまったばかりのあしはそっと加減している、その対照の妙に私はいつも感じ入ってしまいます。ここで私は、「不思議なことには」と書きました。今こういう事実をたびたび見ていれば何の不思議もないのですが、初めに書きましたような伝統的な治療の考え方からすると、これはとんでもない不思議なことなのです。脱臼がひとりでにはまって、しかもあしは自由に動かせるのに、またはずれたりはしない、こんなことはあり得るのでしょうか。到底あり得ないと思われたからこそ、力づくでもこちらからはめてやり、二度とはずれることがないように石膏でがんじがらめにしたのではありませんか。引続いてまだ不思議なことがあります。昔は、そのように、またはずれては大変とばかり、厳重に、確実に石膏で固めたにもかかわらず、その固定の中で再び脱臼してしまうというようなことがよくありました。（お前の固定の仕方はなっちゃいないと先輩に叱られ、またやり直しです。ゴリゴリッとはめて、今度はもっともっときっちりと固める――、子どもにとってはたまったものではありません）ところが、つり紐をつけているだけで自然にはまったものは、固定らしきことは少しもしなくても、子どもははずそうとしません。こんなことをみていますと、私は、「脱臼は、はめようはめようとするからはまらないのだ。また、はずすまいと厳重に固めるからかえってはずれてしまうのだ」といいたくなってしまうのです。もちろんあらゆる場合にそのまま単純な形で通用するわけではありませんが、基本的な考え方としては、過去から現在に至る変遷をみていると、それで間違いはないと思います。それが進歩というものでしょうか。ここでまた私は何とも奇異の感に襲われるのです。普通、医学の進歩といいますと、たとえばコンピューターの導入といったような複雑な機械化がすぐ頭に浮かぶのですが、今問題にしている子供の股関節脱臼では、全くそれの逆行ともいえる簡素化です。つまり大げさな方法で何とでも治してやるという昔の方式から、ごく簡単なつり紐で、子どもが自分から治っていくという、ただそれだけのことが大変な進歩なのです。つり紐はただの紐で、特別新しい材料を使うわけでなく、何百年前であっても作れたものです。こうしてみると、何でも進歩々々と新しいものを追って知らない間に自然をこわし、みずから招いた公害にアップアップしているわれわれは、一撃をくったように考え込まされてしまいますし、また多少そんなことに気づいた者としては少々愉快な気持ちにもなります。

なぜそのようにつまらないことに気付かなかったのだろうか？　というのもひとつの問題です。一口にいえば盲点とい

うべきものなのでしょう。医者は、とくに専門の整形外科医ともなれば、脱臼をみたらまずはめてやらなくてはならない、はめたらはずれないように固めなくてはならない、という一見自然な発想と思考過程で、それを絶対的のものとして疑いを持ちません。そういう固定観念に心を占められていますと、「脱臼は何もこちらからはめてやらなくても自分からはまるさ、何もがっちり固めなくても子どもははずしゃしないさ」というような考え方ははいり込む余地がありません。医者は自分で勝手な病像をかがき、勉強努力といえば、早く先輩のその考え方を身につけることで、やっているうちに何かわかって来たような気持ちになりました。ちょうどアンデルセンの「裸の王様」に登場する、バカに見られたくないため努力する大臣や家来どもと共通するものがあります。つり紐の方法を発見工夫したパブリクは、さしづめとらわれることのない「子どもの眼」を持っていたといえましょうか。「裸の王様」は単なる童話ではなく、われわれが日常ひとつの観念にとらわれている時、それが自然科学的の教義にせよ、あるいは何かイデオロギーであるにせよ、真実を見る眼を失いがちになることを痛いほど見せつけます。

小さな赤ん坊でも、つらい、苦しい、痛い、快い、うれしい等々、それなりに物をいっています。治療の教義よりも優先してそれを聞こうとする態度があれば、もっとずっと早くよい方法が生まれたに違いありません。初めから、子どもは何もわからないから、と決めこんで医者がこうすればよいはずとことを運んでいったところに失敗があったというよりほかありません。もちろんその善意は十分認めますが……。

ちょっと紹介だけのつもりで始めたものが、やはり仕事の話となるとつい長談義になってしまいました。お許し下さい。ただ、子ども、小さい子どもに接していると、何も医者の治療に限ったことではなく、いろいろの面で共通することがあるのではないでしょうか。

私は先天性股関節脱臼の治療で得られた教訓をいつも頭におき、とくに子どもの病気では、何を欲し、何をきらうか、またきらうといっても一時的のもので、次の段階では喜ぶか、さまざまの程度、ニュアンスを先に考え、それに定められた治療方式がマッチするかどうかを考えながら治療するように心がけております。

（整肢養護園）

◆家庭と幼稚園◆

# 家庭と幼稚園のあり方について

畠中徳子

## 家庭、幼稚園のそれぞれの役割と関係責任

幼児の教育にとって、家庭も幼稚園も、それぞれ重要な役割を果たしているが、家庭と幼稚園とが、どのような関係にあることが望ましいかということについては、家庭の側でも、幼稚園の側でも、必ずしもはっきりと、とらえられているとは言えない。

ある幼稚園の母の会でのことである。一人の母親が、「先生、うちの子は、幼稚園では先生に言われて歯をみがいているようですが、うちではみがかないので、困っています。私が言っても、言うことをきかないので、先生の方から、ちょっと注意していただけませんか？」と頼んでいる。

また、先生の方は別な問題で、母親たちにこんな注文をだしている。「私が話をしていると、よく途中から、〝あのね、ぼくね……〟と言って、とびだしてくる子がいますが、話がとてもしにくいですね。人の話を最後まできくということができないのです。家庭で、よくしつけておいて下さい」

このような例は、どこの父母会ででもきかれる話ではないかと思われるが、よく考えてみると、母親も保育者も「子どもとの関係における自己の責任」を放棄していることにならないであろうか。

家庭で、歯をみがかない子どもに歯をみがくように導くのは、子どもとかかわっている親の役割であり、どのように子どもに働きかけるかは、それぞれの家庭の状況によっ

て異なってくる。その状況で、最も適した働きかけができるのは、その場で子どもとかかわっている親であり、その場にいない先生にはできないことである。子どもとの関係における親の役割であり、その役割を果たす責任がある。

同様に幼稚園では、どんな問題でも、保育者と子どもたちとの関係で、解決が目ざされなければならない。子どもは保育者との関係で、また他の子どもとの関係で行動しているのである。家庭で親と一対一で話している時とは、ちがう状況にいる。家庭で親は、最後までゆっくり、子どもの話をきいてやれる。子どもも親には、あわてて話す必要がないかもしれない。しかし集団では状況が異なっている。先生にはその時しか話せないのかもしれない。人の話を最後まできく必要がないというのではない。保育者が集団状況をとらえて、子どもとの関係で解決すべき問題であって、その場にいない母親が、家庭でしつけられる問題ではないということである。幼稚園という保育の場をつくっているのは、子どもたちであり、保育者である。保育の場における問題の解決は、子どもたちとの関係における保育者の責任である。

この春、子どもたちをはじめて幼稚園へ送り出す家庭も、その子どもたちを迎える幼稚園も、このことについての認識を新たにする必要がある。入園の時期がせまると、家庭ではなんとか子どもを自立させたいと願うあまり、〃そんなこともできないと幼稚園に入れてもらえない〃とか、〃幼稚園の先生に叱られますよ〃と言って、幼稚園を子どもへの切り札にしてしまう。これでは、子どもが幼稚園に入る前から、保育者と子どもの関係をゆがめてしまうおそれがある。

家庭でのしつけは、あくまでも親子関係の発展を目ざす親子の役割のとり方の問題であり、親は、自己の役割を遂行することに責任をもたなければならない。幼稚園へ責任を転嫁すべきではない。

幼稚園の側でも、さまざまな家庭で育った子どもたちを受け入れる時に、家庭環境、親の態度というものに関心をはらうのあまり、子どもの行動を家庭と結びつけすぎてはいないであろうか。よく、〃子どもを見ると親がわかる〃という保育者があるが、子どもの行動が集団からはずれているととらえると、それを家庭での教育のあり方のせいだと思いこみがちである。たしかに、さまざまな家庭があり、親のふるまい方があり、子どものパーソナリティの形成に大きな影響を与えてはいるが、幼稚園という集団にあっては、子どもたちとの関係においてふるまう保育者があ

り、保育者との関係で、子どもたちはふるまっているのである。どのような家庭で育った子どもでも、一つの集団の中で、新しい状況においてふるまっている。そこで子どもたちは、自己、人、物とのかかわりあいをもち、行為の可能性をひろげようとふるまっている。集団における問題の解決は、子どもたちとの関係の発展を目ざしている保育者自身に、責任がある。

## 家庭と幼稚園との交流の方法

家庭も幼稚園も、それぞれの場において、子どもとの関係における責任を果たすことが大切であるが、それぞれかかわりなく、家庭は家庭、幼稚園は幼稚園ということで、交わる必要がないかというと、けっしてそうではない。では、どういう方法で、家庭と幼稚園の交流があればよいのであろうか。

家庭での教育も、幼稚園での教育も、幼児の望ましいパーソナリティを形成するという大きな目的、方向性は同じであり、また、それは、集団の中で、対人関係をとおして育つという点に関しても、共通のものがある。しかし、いうまでもなく、家庭は、家庭という、年齢構成も多様で、血縁関係を主とした小集団であるが、幼稚園は、同年齢に近い子どもたちや保育者からなる大きな集団であり、そこでの人間関係は、家庭のそれとはかなり異なっている。したがって、それぞれの場における教育の内容も異なる面がある。たとえば、「手を洗う」ということひとつでも、家庭では、ゆっくり、ていねいに洗うことが目ざされるが、幼稚園では、順番を守って、時間の中でということが目ざされる。それぞれの場において、育つもの、伸びる面が、互いに生かされて、幼児の望ましいパーソナリティが形成されていく。

家庭と幼稚園という集団状況としてのちがい、〃差〃がとらえられ、その上で、それぞれの領域に共通なもの（たとえば、子どもの人や物、課題へのかかわり方）が、それぞれの領域から発見され、子どもの可能性を伸ばすためには、どのようなまわりからの働きかけが必要なのかという話し合い、交流の場が必要になってくる。それは、幼稚園と家庭を結ぶ〃連絡船〃であったり、〃父母会での話し合い〃というかたちなのである。

ある幼稚園での例である。その幼稚園では、必ずしも、遊具などの片づけをしなくてもよいことになっている。子どもにまたあとで使う予定があるという理由があるときは、片づけをしないことが認められている。それを連絡帳

で知らされたある家庭では、子どもの意図をとらえ、幼稚園での教育のあり方を受け入れながらも、家庭生活に必要な空間と子どもの占めている空間の調整をせまられて、家庭では、部分的にでも片づけが必要であることを、子どもにも、幼稚園の方にも理解してもらうように働きかけたという。

これは、幼稚園や家庭で子どもとのかかわりあいにおいて、体験しながらとらえているものを、互いにだしあうことにより、子どもとの関係発展の方向性をさぐり、その発展をもたらす方法を発見していく過程である。けっして、一方的な幼稚園側の家庭への指導というようなものではない。

子どもの教育にとって、このような家庭と幼稚園の交流はきわめて大切なことであるが、交流がうまくいかないとき、あるいは、新しい領域での子どもの可能性を発見することが必要になったときは、地域社会にある教育相談などの機能が生かされるべきであろう。教育相談活動をとおして、親も保育者も、子どもの新しい可能性を発見し、自己の新しいふるまい方を発見できることがある。地域社会における教育相談活動は、家庭と幼稚園との関係に発展をもたらすことのできる機能を常に果たしていることが必要であろう。(注)

おわりに、幼児の教育は、家庭と幼稚園でのみ、果たせるものではない。家庭と幼稚園が、子どもとの関係において、それぞれの役割をもち、その関係において、その役割を責任をもって遂行しようとすると、どうしても地域社会へ、国家へと働きかけざるを得ない問題がたくさんある。たとえば、子どもの生命を交通事故から守ろうとすれば、積極的に社会へ働きかけなければ、子どもの生命を守ることが危い時代になっている。このような共通の目標に向かって、家庭も幼稚園も、互いに交流して、新しいエネルギーを生みださなければならないときであると思う。

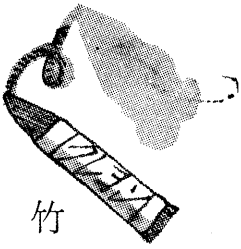
(立教女学院短大幼児教育科)

注　昭和四十五、四十六、四十七年度　文京区教育センター紀要　参照

◆家庭と幼稚園◆

# 家庭と幼稚園―一日入園―

竹中京子



大自然の営みがはじまります春にはまだ早い三月ともなりますと、入園式を待ちわびていた子どもたちのように、つめたい土の中で、久しく耐えていた球根が前夜の雨にそっと顔をのぞかせてまいります。津々浦々の幼稚園が、あるいは大きく、あるいは小さく、いっせいに門を開いて、初めて入園してくる子どもたちをあたたかく迎えるために、準備を急ぐ姿が見られます。帽子掛にロッカーに、下駄箱にと、まだ見ぬ子どもたちの顔をえがきながら、何かと心をくだいている職員の姿は、春の光のようにあたたかく感じられます。

私たちの園では四月集団生活に入る前に、幼稚園とはこんなところであるということを、保護者の方々にご理解いただくために、保護者と子どもの一日入園をこころみる計画をいたしております。最初のこころみは、入園面接が十一月初旬から中旬にありますので、一ヵ月後に実施しております。

胸に組わけのリボンを係の先生につけていただき、親は保育室の入口まで子どもをつれてまいります。迎える先生の笑顔が、不安な子どもの心を大きくとらえて、一人二人と楽しく用意された保育室に吸い込まれるように入って、わりあいに早く遊びの仲間入りができることも、最近の子どもたちの姿かと存じます。泣いてなかなか親から離れない子どもも二、三人はおりますが、時間をかけて、離れられるまで、そのへんは自由にいたしております。保護者のために用意されたホールでは、最初の説明会ということで、病気欠席者をのぞいてほとんど出席されるのが最近の姿で、大変うれしく思っております。時間は正確に始めることが望ましく、園長のお話は、これからの園の方針と今後の保育の進めかたをわかりやすく話されます。注意事項などもできるだけ具体的な例を多く示して、知らせておくことも忘れてはならないと思います。

入園前の心配として、字がよめないので、自分の場所がわからないのではないか、気が弱いので親から離れなかったらどうしよ

うかなどは当然のことです。集団の中へ入れば心配なくやれるというようなことをいろいろお話しして、お母様方にそのためにはどんな配慮が必要であるかをよく話し合うことが大切であるように思います。四月入園までにこれだけは是非実行していただきたいと思いますことは、靴をぬぐ、はくこと、洋服のぬぎ着、食事の前には必ず手を洗うこと、口をすすぐこと、うがいを時々すること。それから用便なども、朝必ず習慣にしておくようにすることが、いろいろ遊びにも影響することをしばしば感じます。子どもたちの身のまわりのことがひとりでできるようにしておくことは、これからの長い人生の最初のよき習慣となり、力強い子どもとなって成長していく基礎が築かれることを考えて、手つだう手を休めて、見ている大人であってほしいと願うばかりです。規則正しい習慣が身についてしまいますと、自分で何でもしてみたい時ですから、何度でも失敗を恐れないでさせてみることです。ただ、何でもためさせてみるといっても、これからの生活には明らかに危険であるということもでてきます。あらゆるできごとを、ふれあいの中で、処置してゆくことが容易にできるようになる子どもとして成長していくようにとの配慮も必要だと思います。あまり大人が察しよくするために、依頼心が強く、自分でできることもしないことが多くなり、幼稚園の生活に入ってから自信がないために大変意欲を失う結果ともなりますので、充分注意して育てていただきたいと思います。いざとなれば心配することもなく、規則正しい生活が送れるように、先生も子どもも一緒になって考えて進んでいける毎日こそ望ましいことであると思います。

子どもたちをみつめておりますと、大人よりもずっと素直な表現を、野に咲く花を見ても、散っているもみじの葉一葉でも、〝先生きれいでしょう〟と、そっと渡して走り去ります。輝いたあの瞳を大切にしてあげなければ、としみじみ教えられる毎日でございます。幼稚園生活になれて、活動的になっていけば、自分から進んで、よろこんで話し、書き、歌うことなどこちらがとまどうほどに積極的な姿に変わります。お母様方にも、それまで待っていてくださいとお願いいたすことも、入園前の私たちの保護者への心くばりであると存じます。

もう一つ、具体的な疾患などあるお子様は、入園前に充分治療しておくように話し合うことも、大切なことと思います。このようにして二回行ないます一日入園が、新しく入園してくるお子様にもお母様にも、何か役立つことと思いますので今後もつづけてまいりたいと思います。

（十文字幼稚園）

◆家庭と幼稚園◆

# イギリスと西ドイツの幼稚園では

八森知栄子

私は昭和四十六年から四十七年にかけて約七ヵ月間、ヨーロッパの幼稚園を自分で選びながら見学してきました。その時に見たり聞いたりした入園についてこれから述べてみたいと思います。

## イギリス

イギリスのナースリースクールには三歳と四歳の子どもが行きますが、公立のナースリーはロンドンとかマンチェスターなどの大都市にしかないとのことでした。私のしばらくいた南イギリスのプールという町では、日本の保育ママにあたる婦人が三・四歳の十人位の子どもを預っているプレーグループが十数個ありました。それぞれのナースリーにはウエイティングリスト(登録名簿)というものがあり、それには子どもの名前・住所・年齢が書き込まれていました。そして親の移動や、五歳の子どものインファントスクール(幼児学級)への進級で、欠員がでると、ウエイティングリストに登録されている年齢に達している子どもから入ってきているようでした。生まれてしばらくすると登録するお母さんもいるとのことでした。

ロンドン市内には約三十の公立ナスリースクールがあり、そこでの保育料は「教育」ということで無料です。私の訪ねた三つの公立ナースリーには、一クラス三十名の二クラスがありました。けれども二つの部屋と庭で六十名の子どもたちが自由に遊んでおり、先生の受け持つ子どもがそれぞれ三十名なのだなという印象を受けました。ここのナースリーも登録名簿があり、ある園長先生は、ノートに書き込まれている子どものリストを見せて下さいました。その時には五十名ほどの子どもが待っているとのことでした。やはり進級や親の移動によって欠員があると子どもたちが入園しているようで、ある園で私は、新しくナースリーに入ったであろう子どもを、保育時間中に見守っている一人のお母さんに出会いました。

## 西ドイツ

西ドイツの首都ボンには、私のいた当時、教会立と市立あわせて九十九のキンダーガルテンがありました。

子どもは両親がカソリック系の場合はその幼稚園に、新教の時にはその幼稚園にだいたい通っているとある幼稚園の先生は言われました。それぞれの幼稚園はワルテンリステ（登録名簿）をもっており、イギリスと同様に席のあいた順に子どもが入っていました。市立の幼稚園にはパーソナルボーゲン（個人調査書兼申込み用紙）というのがあり、それには子どもの名前・年齢・住所・国籍・出生地・宗教・兄弟・予防接種を受けたかについて、両親の名前・出生地・職業・住所・両親の状態（結婚・死別・離婚・別居・独身）・同居人について書き込まれるようになっており学歴の欄はありませんでした。

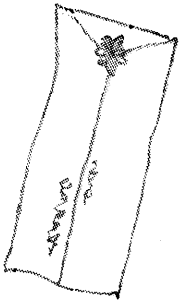
私の訪ねた十三の幼稚園はほとんどが三歳・四歳・五歳の混合クラスよりなっていて、各年齢の数は一定ではありませんでした。そのために欠員のできた順の子どもの入園が自然に行なわれているように感じました。ボンに住む私の知人は自分の娘さんの入園の時のようすを次のように手紙で知らせて下さいました。

「――さて裕恵も二月から近所のキンダーガルテンの午後のクラッセに入園し、毎日喜んで通っています。今月から三、四人新しく入りましたが、日本のような入園式を想像し、初日は親子共やや緊張して出かけましたが、入口で「では四時半に迎えに来て」と言われただけでやや拍子抜けいたしました。子どもは十五人ほど、タンテ（注・幼稚園の先生にあたる）は四人、入園金もなく月額二〇マルク（注・一マルクは約百円）を銀行に納めるだけです。――」

イギリスでも西ドイツでも幼稚園の絶対数は足りませんでした。ボンでも三歳から五歳までの半分の子どもしか幼稚園に行けていないと、教会市立すべての幼稚園を管轄しているユンゲントアムトの役人は言っておられました。幼稚園の先生は、母親がいくつかの幼稚園に申し込んでも行けない子がいると言われました。私がある園を訪ねている時、先生が子どもを入園させてほしいと頼みに来たお母さんを断わっている場面に出会ったこともありました。西ドイツの幼稚園では統一的な行事が少ないようで、私のいた夏から冬にかけてはクリスマスが一番の行事でした。日々の保育が日常の遊びと同じように静かに繰り広げられ、生活の中に保育の基盤があると思われました。行事的なものは家族や地域の子どもと、幼稚園の外で参加しているようでした。私は十一月の聖マルチン祭の夜の親と子のランプ行列を見たり、クリスマスの時のキリストの劇を見て、このような環境の中で子どもたちは育っていくのだなと深く感じました。（お茶の水女子大学大学院）

# 私の保育—入園当初—

清水エミ子



あなたの保育って、なに？　と、問われ、今さらのように、自分の保育をみなおさなければと、体に電流が流れる思いで編集部からの依頼を手にしています。

私の保育とは、

子どもと一緒に生活することの一言につきるように思えます。

子どもと一緒に生活して、自分をいかしながら、生きていくことのいとなみをつたえていくことのように思えます。生活を創り出す喜びをわかち合い、協力の喜びを身につけていくことではないでしょうか。

そんなことは、あたりまえ、保育者すべてがそれを目ざして保育しているといわれそうですが、私も、みなさんと同じことをめざして、平凡な保育をしているということがたしかめたかったのです。

**☆子どもたちが、自分で、手や足を動かして生活することを手助けする。**

**自分ですわる所をみつけ、きめてすわる**

新入園児たちが、保育室に入って、座席を自分でえらんで、きめていくようにはげまし、実行させていきます。

とまどいを喜びに変えていくキッカケをみつけ、しらせていく保育につとめます。

「○○さん、どこにすわろうかしらね。よくいすをみて、らくそうないすにすわっていいのよ」

「××さんは、つくえのせまい方にすわるかな、ふたりならべるほうにすわるのかな。どっちがいいか、きめてすわってみましょうね」

「みんな、いま、せんせいにすわるところきめてもらわないで、ひとりでさがしてきめられたわね」

「せんせいおしえてあげようとおもって、まっていたけど、おしえないですんじゃったわ。びっくりした」

「となりにすわっているお友だち、知っているひとも、知らないはじめてのひともいますね。よくかおをみて、おぼえましょう。せんせいにもよくかおをみせてね」

というように、生活の中で、くりかえされることを、大切に、ていねいにあつかうようにします。

（どんなうたを、どう歌うかということよりもっと大切にしていきます）

**思ったように、遊ぶ**

自分をすなおに出して、遊ぶところが、幼稚園であることをしらせます。

家庭から幼稚園集団に入ってとまどっている子どもたち、ひとりひとりに、むりをせず、遊び出せるように、遊びの場をそなえておきます。

ぶらぶら保育室をぶらついていても、遊具に、自然の状態で、ふれられるような環境をつくっておくようにつとめる。

あまり整然と保育室をととのえてしまうのでなく、気らくな、あたたかみが、生まれ出る位の、ゆるやかなちらばりをのこして遊具をそなえておく。

ひとりが、ひとつずつ手にもつことができるような遊具を、やわらかく、ちらばせておく。

机の上に、自然の状態に絵本をのせておく。（親しみやすい画面を広げておいたり、動物のぬいぐるみをママゴトコーナーにおいたり、子どものイスに、何気ないふんい気ですわらせておいたりする）

「あら、あなたがすわろうと思ったイスに、くまがすわっていますから、となりのイスにどうぞすわってください」

「あら、こんな絵本がありますね。なんでしょう」子どもと一緒に絵本をのぞきこむ。

箱積木などを、保育室の一隅にちらばせておき、二、三個をつんだり、ならべたりしておく。

歩いているうちに、足にぶつかったりするようにしておいたり。高く積んで、さわってみたり、くずしてみたいような、気持ちをさそうようにしておく。

**あまり、遊びに、教師がむりにさそいこむことをさけます**

遊具をさわり、いじりながら、自然に遊び出す。自分での遊びを創り出させるようにつとめます。

「ブランコにのりましょうか？」とか、「砂場でお山つくりましょうか？」

「ままごとしているわよ。先生と一緒に入れてもらわない」などと、教師が遊びのせんたくを先どりしてしまっては、子どもたちは、ひとりで歩き出さなくなってしまうのではないのでしょうか。ほったらかしにされているという気持ちをもたせずに、そっとみまもる余裕がほしいものです。

入園当初は、教師は、ふだんの数倍、歩きまわらなくてはなりません。歩け、歩けの保育をします。歩いて、多くの子どもとふれあい、すれちがって、笑顔を交しあうことを数多くすることにつとめます。

「あっ、またあったわね、先生、あっちの方に行くけどいっしょに行ってみない？」とか、

「いま、ブランコうごいているか見てくるんだけど、いっしょに見にいってみましょうよ」

とさそってみます。

子どもたちの体の位置を、自然の状態で変えてゆくことにつとめます。

体を移動させるのです。ほんの少しでも、十センチでも、十五センチでも、今いる所とちがう所に体を移させるようにつとめます。

「ちょっとこれ、持っててちょうだいよ」

「あっ、おねがい、いっしょにおさえてて」

などと、ちょっとした、手つだいをさせるようにし、友だちを、多くながめる場を多くあたえるようにします。自分の体を動かしていく中で、遊んでみたいと思う心を育てるのです。

時間をかけて、遊びをえらばせ、ゆっくり遊びに参加させます。

ボールをころがし、けとばし、ふれるようなことから、（このために、初めからきちんとかたづけなどをするのではなく）

「この中が、積木入れ場なのよ」

「ここがボールの場所ね」

というように、少し数をへらして出し、箱からはみでてこぼれてしまわないようにし、遊具をいじることの気らくさをしらせます。（これは長期間するのではなく、入園一週間位または、十日位できりあげます）

きちんとかたづけることの必要と、方法、教師が、こうしなさいというのではなく、子どもの中から、こうやるときちんとなるということを発見させるようにしむけます。

「こんど、これ入れてみてよ。こんどはこれどうかしら」など、積木など、きちんと箱におさまる順に手わたしていくことも一方法としています。

**自分の生活の場を自分で作る**

くつ箱、ロッカーの場所を自分できめる。

入園式の日前に、くつ箱や、ロッカーに名札をはっておかないのです。

入園式の日に、名前を書いたカードをおみやげにわたし、自分の家で、自分の思うようなしるし、（絵ではない）をつけてくるようにします。

母親に、手伝ってかいたり、むりに絵を描かさないようによくたのんでおきます。

次の日の朝、自分で、カードにのりづけをして、自分でえらんだ場所に、しるしとして、はっきりつけます。

自分の背丈、自分の好みの場所をえらんでつくる喜びから、自分の生活を、つくりだしていくことの喜びとして知らせていくようにします。

「みんなが、自分できめたくつ箱よ。よくおぼえて、あしたもそこに入れましょうね」とはげます。

ロッカーも、友だちふたりで場所をきめてカバンと帽子掛けをきめ、クレヨンなどの、材料や教具を入れる場所を作っていきます。（教師が、クレヨン、ハンドカスタ、のり、ハサミ、などに名前をかいて、そなえてしまうのでなく）

母親と一緒に、家庭でたのしみながら、名前をかくところをみせて、かいてもらい、ひとつひとつ、日時をちがえて、ロッカーのひき出しに、子どもたちが入れていき、整備していくようにします。

自分のものを、どのように入れて、どうやって使うかも、自分の考えでさせるようにつとめます。

このように、絵を描いたり、うたったり、おどったりする前の時期を、充分につかい、ひとつひとつの生活を、自分の手で作っていく実感を、体験を通して身につけていくことをみまもります。

通園カバンの中味も、母親が、前の日から入れてしまうのではなく、おき場所をきめておいてもらい、子どもが、朝、自分の手で、カバンに入れるように実行してもらいます。

おべんとうも、台所のどこかにおいてもらって、

「おかあさん、おべんとう、ありがとう」と、あいさつをして、自分でカバンに入れるようにしているのです。

（大田区立蒲田幼稚園）

# 私の保育
## ―私の子どもたち―

大崎利恵子

この文章を書くに当たって、「私の保育」という題をいただきました。「私の保育はこれこれしかじか」というか、語れるようになりたい！　私の願望です。ただ一年半の保育者としての生活の中で「前とちがったもの」というより、以前には気づくことのできなかったものに、今、ほんの少しずつ気づいて、考えようとしていることがあるように思いますので、断片的ではありますが、それらをここにしるしてみることにいたします。もし、どうしても題名がいるのなら「私の子どもたち」とでも言えばよいのかしれません。

私のクラスは四歳児、男子二十名、女子二十名計四十名でなりたっています。昨年は一年園生活を送った五歳児を途中から担任したので、今年集団生活は初めてという四歳児に出会って本当に驚きと喜びと困惑の連続でした。一人一人いくつものエピソードをもち半年間、いろいろな出来事（？）を経て、今の状態まで成長してきているのだと思います。

☆　☆　☆

わがクラスの最強のあばれん坊はT君です。ところが、ちょっとしかられたり、ころんでけがをしたり、注射の時等に泣きべそをかくのも、まず彼なのです。彼は、今までの家庭の生活とちがう幼稚園で遊ぶことにとても満足しています。活動力あふれる彼が、縦横無尽に保育室をとびまわる時、友だちにぶつかってしまうのなんかあたりまえだし、誰かが使って遊んでいる物は、なおさらやってみたいからとりあげてしまうし、机の上は乗るためにあるようなものです。そんな彼に、朝のあいさつからはじめて、人とのつきあい方を知らせていくのは大変でした。いまだに彼をみるとふるえてしまう女の子がいっぱいです。でも、十月のある日、どろ粘土で製作をしていた時のことです。わりばしを利用して、植木鉢にお花をうえてみたり、うさぎやかめをしっかりと四つ足でたててみたりしていました。むろん、だいぶ教師が手をか

した部分もありました。しかし、みんな自分の作品に満足してつくっていました。T君も彼らしくどろ粘土をいっぱい使って大きなぞうを作りあげました。でき上がった作品をならべて、あれやこれや話をしていると、一匹のうさぎをみて

「あ、これ、とんでいる！」

と彼が言っています。前後に足を出して、おなかを地面にくっつけているうさぎで、私には、というより大人には、寝ていると見えるような形でした。彼の目にはごく自然にそのうさぎが生き生きとしてみえたのでしょうか。

また、動物園に行った時、つるのおりの中に魚がえさに与えてありました。なぜかその魚は頭としっぽだけでした。それをみた彼は

「かわいそうだね、頭としっぽしかないよ」

となげくのでした。もうたべられないと思っているのか、おいしい所がないのをかわいそうと言っているのか、そこまではつかみとれませんでした。しかし、T君のその言葉は、何か、自分にはなくなった感覚を知らせてくれました。ともすれば、彼の粗暴さのみに目が向かい、おとなしくさせることばかりに熱心になってしまいがちな自分。でも彼がまるでわくにはまっていないからこそ持っている新鮮な感じ方、私たちにはあたりまえにしか思わないことにも驚き、大人は常識でしか考えないことを初めて考え、どんな小さなことにも喜べる感覚というものを、毎日の保育の中で、どのように大切にしながらも、彼に行動のルールを教えればよいのでしょうか。私の言動は果たして目的にそっているのかどうか、「Tちゃん！」とどなってしまっては、つくづくと頭をなやませている次第です。

新鮮な感覚、子どもの純粋な目をつぶしたくないという悩みをいちばん感じさせられるのは、なんと言ってもJ子に対してです。J子の天真爛漫さは言葉ではとても表現しきれず、かえって説明してつまらないものになってしまうのがこわいくらいです。おばけの話（「もりのおばけ」という絵本があり、それを利用して運動会の競技をしたので）をすると、もう、本当にこわがって職員室に逃げてしまい、なかなかもどらないし、インフルエンザの予防注射は、あとで大きな注射をしなくてすむように、小さい方がいい人がするのよと話されると、かぜぎみだからJ子はしないことになっているのに、「私していく」と言いだすし、素直そのものというぐらい話がまっすぐに通じていきます。それだからでしょうか、物事によく気づきます。職員室の机の上に誕生会の花がおいてあると「これだれの？」ときく。主任のH先生はふざけて「もちろんぞう先生（主任先生の通称）のよ」そうするとたいていの子はだまされるのですが、J子は自分の誕生会の時に、H先生がいっしょだったのをちゃんと思いだし「うそだもん」と

やりかえします。またまたH先生が「先生はこんなに誕生日があるんだもの」と両手をひろげてみせると、J子はしばらく考えこんで、

「そんなに誕生日やったら、頭がねずみ色になっちゃうよ」と反応。

これにはさすがのH先生も感心してしまったと私に話してくださいました。

私はその話をきいて、J子のその「切れ」におどろくより、J子とそうした会話をかわせることにあこがれてしまったのが本音です。自分の貧困さがいやになります。私など、せいぜいJ子に、ミルクをのんでいるとき「ぜんぶのむのよ、そうすると大きくなるからね」とやられて、にやにやしてしまうのが落ちです。彼女の何かに私がついていけないのかもしれません。ただ、問題はやっぱり、そういった天真爛漫さだけでは生活していくことはできないことです。こういった子に共通して言えることは、のろいということではないでしょうか。よく言えば、おっとりしているとか、こだわらないとか、のんびりしているとかなのでしょうが、集団生活の中で、やはり、みんなとテンポがあわせられなくては困ると考えてしまいます。それは教師の都合から考えているのかもしれません。

たとえば、ならぶ時になど、J子はいつもビリで平気です。他の子が先をあらそうのを見て、腹だたしく思い、J子のようであってほしいと思うことだってあるのです。その反面、おべんとうのしたくの時など、みんなが待っているのに、ちっとも急がず、ああだ、こうだと楽しんでやっている彼女を見ると、こんどはおそいことが腹だたしくなってきます。本当に手前勝手なのかもしれません。でも、やっぱり、遅くても、うろうろしていても、どうぞご自由にというわけにはいかずに、楽しいことの反面に保育の悩みがつきまといます。

こうして、一人一人のことを考えていくと、心から一人一人の個性を大切にし、伸ばせたらと考えずにはいられません。そして、個性を大切にするということは、子どもを自由にしてあげられることなのかとおぼつかない思いをもちます。いったい自由って何なのだろう。講義を聞いたり、本を読んだりすると、子どもの自由を大切にしなくてはいけないという言葉によく出あいます。でも、これは言葉のニュアンスの問題なのかもしれませんが、子どもの自由を大切にというより、むしろ子どもは自由であり、いかに不自由をおしつけないかということなのではないでしょうか。ただし、ここでどうしても考えなくてはならないのは、自由ということの中味です。いわゆる自由保育といわれ、一斉保育といわれることが、自由と不自由でしょうか。子どもが自分のしたいことをすること、すなわち自由であり、一斉にさせること

は不自由であるから、自由を大切にするということ＝自由遊びでしょうか。誰に聞いても、そんなのはおかしいと言われると思いますが、じゃあ自由とは一体？　最近、T君やJ子、その他の四歳児たちを見ていて、私は私なりに自由ということをつかまえたような気がしています。（でもこれは二年目のとらえ方であり、これからもずっと同じように思うか、ちがってくるか、それは私自身にもわからない無責任さです）

☆　☆　☆

自由と同じ言葉を使っても、大人のもつ自由と子どものもつ自由は違います。大人は、どこに住もうと、どんな職業をもとうと、何を信条としようと、すべて自由なのが、今の日本社会です。しかし、子どもは親のもとに住まい、親のいいつけにしたがい、親の思う学校に行かされ、それこそ遊びまで、してはいけないことがあり何と不自由でしょう。行動という点では、大人は自由であり、子どもはちっとも自由ではありません。しかし、大人の自由とは、そういった表面的な点だけでしかないとも言えるのではないでしょうか。社会的地位とか常識とか、つきあいとか、目に見えないものにしばられた大人は考えること、発想、心の状態等々といった点では、まるっきり不自由であり、せいぜい、きらいなやつの悪口を心の中でつぶやくぐらいなものです。それにくらべた時の子どもたちの自由さといったら、あのやわらかさは、石頭とはくらべものになりません。まさに子どもは自由です。

保育の中で大切にしなくてはいけないのは、そういった心の状態、心情の自由さ、発想の、考え方の自由というものなのではないでしょうか。

では、どうすればそれができるのか。子どもたちが何をしてみてもよい、いつでも勝手にしていてもよいわけではないことぐらいは私にもわかります。人間が社会で生きていく上で知らなければならない当然のルールといったようなものを、それを知らない幼い子たちに教えていくには、どうしても行動面での規制が生じてきます。社会生活を営む人間なら、してはいけないことはたとえ子どもでもあるわけで、逆にそれがあることが、発想や心情の自由をうばってはならないのだと思います。確かに、行動面での規制が強すぎることは、結果的に子どもたちの自由をも束縛することになってしまいます。しかし、たとえ一斉保育の中でも、一人一人が自由に考えられる場を作ろうとすることが大切なのではないでしょうか。そして、さらに、みんなといっしょにできないということは、一つの困った状態であり、いっしょの時にこそ、生き生きとのびのび活動してほしいとも思うのです。同じ場所に集められ、同じ活動をさせられることの不自由さより、どんな場面にしても、くだらない大人の考え方をおしつけられること

の方が、子どもには不自由なのではないでしょうか。

それでは、子どもは何でも自由に発想できればよいのかと言われれば当然「ノー」です。子どもがなぜ自由に考えられるかとおしはかると一つには、結果を知らないからという面があると思います。つまり、次には、子どもたち自身、試してみる必要があるのではないでしょうか。そこで保育者は、子どもの発想を大切にする行為のさせ方というものを考えなくてはいけないなと私は思うのです。どうすればその発想を生かした活動ができるのか、むずかしいとしか言えません。いつだったか例のT君がいつものように遊びまわっていました。ペープサート用のたけの棒をみつけ、彼はさっそくK君とエイヤーとチャンバラを始めました。今はもっぱらライダーごっこの格闘が中心で、昔のようにチャンバラははやっていない。それでも棒をみれば、やってみようと思うのは、T君にすればごく当然の思いつきだったのだと思います。私はさっそく、飛んでいって「目をつっついたり、耳をたたいたりしたらあぶないでしょ。だからこれはなし」と例のごとく禁止！　T君がやったらただじゃすまないし、実際、細い竹であぶないことは事実でした。

でも、理由がどんなにあったとしても、T君はやらせてもらえなかったことは事実でしょう。彼の活動は一つ小さくされてしまったわけです。反省しました。そして、そこで気づかされたことは、新聞紙をまるめてわたし、「こっちでやってちょうだい」と言えばよかったのではないかということです。彼の発想を大切に、彼の個性をのびのびとさせたいと思うのなら、そこで、いかに活動させたらいいのかと私は考えなくてはならなかったのでしょう。そしてこのことは結局、こうした保育をしたいと思うのなら、ことあるたびに説かれることですが、子どもの気持ちにかえらなくはいけないということでしょうか。子どもが何を発想しているのか知れるだけ、子どもの気持ちになれなくてはいけないのでしょう。

ここまできて、ひどい自己矛盾におちいります。すなわち、考えているけれど、できないという現実です。安全という名目のもとに禁止の連発をしてしまう自分は、結局、まだ保育を語れるようになることへのあこがれをもっているだけの方がよいようです、それでも何でも、J子の天真爛漫さをみつめ、習い、T君ともみあい、子どもたちのかぎりない可能性の中で、一生懸命、自分がイヤな人間にならないように（かっこいいことを言うだけ言って何もしないというような）努めたいと思っています。

（文京区立汐見幼稚園）

橋詰良一著

# 「家なき幼稚園の主張と実際」より（二）

## 第三　名のおこる所以

私が大正十一年の春に、私の居住地の池田室町という新市街（大阪から北へ四里、阪急電鉄沿線、当時戸数約二百戸）へ配布しました、私の趣意書を見ていただけば、大体のことがわかっていただけると存じます。

△『家なき幼稚園』の発起

室町父兄たちの御精読を切に希望いたします。

家はなくても幼稚園はできます、生き生きーした保育の方法を考えて行きましたら、家に囚われた幼稚園よりも、家のない幼稚園の方が幼児にとっても幸せかもしれません。

家のあるためにその家にばかり閉じ込められたり、箱庭のような運動場にばかり追い込まれて、めったに野へ出ることも山へ行くこともできないような大阪あたりの幼児は不幸せです。

広い広い自然を占有している郊外住宅地の人々が大阪あたりの真似をして窮屈な家を建てることから手を着けなければ幼稚園ができないように考えるのはつまらないことだと思います。

工夫のつけかたによっては「家なき学校」でも立派にできるものだと考えていますが、保育にあっては特に「家なき幼稚園」が自由で簡単で愉快だと思われます。

私は野天教育、野天保育などいう言葉が衛生家の立場か

ら臨時のものとしてのみ唱道されることを飽き足りなく思っているのでございます。

で、思い切って室町のお子さんたちに先ずこの「家なき幼稚園」を捧げたいと思うのでございます。

我が日夕尊敬しつつある大阪毎日新聞社長本山彦一翁は、非常の喜悦を以て左の辞を寄せられました。

家なき幼稚園、これは非常に面白い実際的な良考案だと思う。或はこれが急先鋒となって大に社会を驚醒し、この種、家なき幼稚園の流行を見るに至るかもしれない。シッカリやって頂きたい。私も相応な声援と物質的の援助をも辞しないつもりだ。この上、善は急げで一日も早く実現するようにしてもらいたいものだ。……

本山　彦一

私がこのような案でも室町父兄たちの了解を得て児童界に実現する日の少しも早からんことを祈ります。

適当な先生の心当りもできておりますが、更によき人を御すすめ下されば結構に存じます。

どうか「家なき幼稚園」の別項の「実行案」を御覧下さいまして、御会得が参りましたら御子たちの御入園を切望いたします。（実行案は別記）

室町七番地

発起人　橋詰良一

以上の趣意書にあります通り、私の第一の希望は「家なき」というところにあって「家」というような大人が工夫した建物から子どもを解放することであると信じたからです。

「家なき」という言葉には生硬なきらいのあることは十分に知っておりましたがあくまでも園舎というような建物にとらわれないことを強調するために名づけたもので、理学博士の山本一清氏等は最近に「家要らず幼稚園」と名づけたらどうだと真面目に言って下さいました。その他にも色々の改名案を持ち寄ってくれる人が絶えないうちに、とうとう八年の月日を経過しました。

名まえなどはどうでもよいので、今更改めるにも及ばないとは思いますが、強いて改めるなら「自然幼稚園」とか「大自然幼稚園」「野の幼稚園」等がよろしかろうと思っています。

## 第四　最初の理想案

前記の趣意書に添えて、私の配布した最初の実行案が、また最初の理想案でもあります。

△『家なき幼稚園』の実行案

一、「家なき幼稚園」に入園する子たちはお道具として「小さな三脚いす」一つだけを準備すればよろしいのです。時によってお弁当もいります。

一、園児は毎朝家に待っていればよろしいのです。

一、先生は、折々順序をかえて家々へ児たちを誘いながら路上保育（唱歌、行進）といったようなものを実行します。愉快に話しながら歩くのもよろしい。（これが毎日の家庭訪問にもなります）

一、皆が揃ったら自然の保育室で自由保育を行ないます。

一、自然の保育室とは呉服神社の森、猪名川の木かげ、大光寺の林、城山の平地、室町の町々、周囲の野原、至るところにございます。そこに三脚いすを並べて好きな保育をするのです。

一、木の実も草の葉も花も、ちょうも、魚も、真に神さまから下さった子たちへの恩物です。うぐいすの声もかえるの歌もみんな児たちを遊ばせる神さまのコーラスです。

一、暖かい日にも、寒い風にも浸りながら大自然のふところを占有して何にも妨げられない自由な自由な保育を先生にしていただこうというのです。

一、いわゆる幼稚園ではないのですから規則に囚われることもないでしょう。時間も定めなければ休みも定めません。

一、雨が降れば休みです。寒さが強くても休みです。暑いときにも休みます。しかしお座敷でも貸していただく家があったらすぐ開きます。

一、ある建物を折々は貸してもいいとおっしゃって下さる方もありますが、テントぐらい建ててもよろしい。

一、こうして純真な自由保育を自然保育室に試みたいというのです。

一、したがってこんな保育に適した先生がほしいのです。先生は幼稚園の全部です。そして子たちは先生の全部です。

一、当分は月謝を月に三円ぐらいにしたいと思います。右のうちで開園後にだんだん変更しなければならなくなったことや、またはついに理想に止まって、行ない得なかったこともありますが、この二、三を除けば今もなお最初のまま

に行なっているものが多いのです。

**変更した項目**

入園の当時に持ちよってきた、たたみいす（最初の考案は画家の写生に用いるような三脚いすでもとしていたのですが、いろいろ研究の結果、四脚のたたみいすにしたのですが）それが、百になった時（二年目をすぎて）に入園金と変更しました。このたたみいすは今なお使用しております。

また最初は園児が家に待っていると、先生がその家々へ誘いに行って、歌いながら手を引いて次から次へと回っていくことも路上保育であると考えていたのでありますが、それは全く空想でありました。かつて同様のことを思いついた人もあったようですが、畢竟は空想にすぎなかったと思います。何分にも幼稚園に行くことを楽しみきっている幼児を家に待たせておくことは、なかなかできないことで、最初の事務所にしてあった私の小さな家の門口へ、早くからワイワイつめかけてきて、その混雑は名状すべからざるものになりましたから、開園後数日で集合所をお宮様と定めました。

**着手の主要点**

園の実行着手の主要点としたところは、

（一）むすめと母との協力

（二）幼児を回遊（連れて遊び回ること）に導いて行くこと

（三）小使という特別の使用人なしに車を交互に押して行くこと

以上の三項目を要件として実行に着手しました。が、労役にはどうも最初から母や姉を使用することの困難もありましたので、とにもかくにも女中のような人をやとってはじめました。

## 第五　開園の経過と準備

今日から見れば、いろいろたくさんに必要なこと、便宜なことも考えられますが、それはおいおいに一般の参考として申し述ぶることにして、ここではまず私の実行した、心と過程を聞いていただきたいと思います。

**園児の募集**

これは前にあった「趣意書」と「実行案」とをかねて私の主張を理解してくれている人へ送って、その人々の紹介や直接申し込みによる園児を集めることにしました。

最初は二十人もあればと考えていたのですが、意外にも六

十人ほどの申し込みを得ましたので、その父兄たちを町の倶楽部へ集めて十分理解のできるように懇談をしました。

### 独自の発起と着手

「およそ一切の計画には二つの注意すべき事項がある、一つは絶対に善であること、一つは実行が容易であること」といったルソーの言葉に始終私は教えられておりました。したがって、その実行を容易にするために、無用の依頼や逡巡をしないことは何事についても私の平素の主張でした。

私は、この園の創案についても、実行についても、一切を自己一人の責任として、決して他によったり、頼んだりするような、姑息な行き方をしないと決心しました。

ですから、相談やせんこうに力を労することなく、何でも即決即行を主義として参りましたため、議論倒れになったり、文句倒れになったりする弊からは免れることができたと信じています。

### 保母の採用

私の一番苦しんだことはこの最初の保母の採用をいかにするかということでありました。しかしどうしても妙な因縁による紹介や推薦によって人を採ることは避けたいと考えましたので、まず新聞の三行広告に左の通り書いてみました。

「家なき幼稚園というものをつくる、保母入用、希望者は池田室町橋詰へ」

ところが三十人余の希望者が二日の間に殺到したので三日目にその人々に会ってみますと、驚いたことには皆長らく保母をしていて、今は恩給をもらって遊んでいるという老婦人ばかりで、私の熱望していたような若い人は一人も見られませんでした。

が、来た人の中から最も年若いと思われる二十四、五歳から三十歳位までの保母を二人だけ来てもらうことにしましたけれどもこの人たちは一年も継続することができなかった。そして皆家のある幼稚園からの落ちぶれを嘆息して、逃げて行ってしまいました。

### うれしかったわが子の協力

野の幼稚園を始めてみた最初に私を泣かせた一番大きなものが、保母の得がたいことであったことは、この通りでした。

それは給料のための財源を持たないからでもなく、学才の高きを望むがためでもなく、実は、家というものを持たぬ野の中の幼稚園であるがためで、家から野へ……の落ちぶれを

感ずる人ばかりがあって家から野へ……の尊さ、気高さを感じてくれる人のあまりにも乏しかった悩みでありました。

泣くように訴える、おりおりの私の吐息を、いつとはなしに聞いていた私の娘、それはちょうど女学校を卒業になっていた芹子が「手伝いましょうか」という思いがけもない言葉に私は思わず手を合わせたいような心地が起こりました。

そして芹子が園へ来ると間もなく、お連れの嬢さんたちが、手伝いに行きたい行きたいといい出してくれて、初めて、私の望んでいた純なる若い女性を子どもの国へ迎えられるようになりました。

卒然として、園は若がえってまいりました。ういういしい人の歌う声に引きつけられて心からの声を張り上げる子どもの国が生まれて来たように見われました。

家では気儘ばかりいっていた娘も、園では何と思ってか真剣になって私のかわりに苦労してくれるようにも思われます。親馬鹿の加減でもありましょうがうれしくてたまりませんでした。

今はもう若い母アさまになって、園にはいないのですが、そのかわりにまた次の娘が女高師の保母科から帰って、大阪の園を手伝っていてくれるのもうれしい。

愚鈍な上に園長の身うちだというので面倒を傍へかけるのも多いには違いないが、親としては子心に励まされて、何かを教えられるように、また慰められるようにも思いながら、子に感謝する気持ちを抱き得るだけでも、大きな恵まれであることをひそかに喜んでいるのです。

つまらぬようなことですが、理くつや財物では買うことのできない、愛の道場でのよい恩物です。大人へのよい恩物です。ほんとに神の恩寵を感謝しなければならぬとおりおり思いかえさせられています。

## 園の場所

園は自然の野の中ときめておりますが、集合所としての場所を呉服神社の境内とする案に、神主の同感を求めることがなかなか難儀だとされていました。

しかるに、それは思いのほか快よく承諾を得ました。その上、雨の日や酷暑の日には、絵馬堂を使用してさしつかえないという許しをも得ましたので、いよいよ用具の準備ということになりました。

## 用具についての解説

私は、私の幼稚園、野の幼稚園を開くについても、なるべく簡便に、どこへでも持って行けるものを用意するにとどめ

たいと思いました。したがって其の用具の一つ一つもできるだけ便利に幾重にも利用させようと考えました。もちろん、ふるい伝統から何と評されようとも、初めてそれに接する子どもの眼には、子どもの頭にはいずれも立派な神聖なものと考えられるにちがいないだけを確信して、更に心配なしに便利だと思いついたものをとり、用いようといたしました。

今でもその方針は依然として実行しておりますが、ずいぶん重宝なものが世の中には捨てられてあるように思われます。

**1　日記には**　「当用日記」廉価で便利にできている「当用日記」くらい重宝なものはない。しかしそれを学校や幼稚園の日記に使用しているところは少なくて、妙に自家の考案した帳簿でなければ使用しないところに教育者気質があるようですが、私たちは最初からこれに定めていました。この簡易主義を喜んでくださった教育家には倉橋惣三氏があったが、其他の帳面も一切「ノート」にしているのを見てあまり無造作すぎると苦笑したのは、一番最初に来てくれた中年の保母さんでした。

**2　たたみいす**　これは、子どもの持ち歩きに適した重さのもので、開いた時の地から高さが（直立）八寸ぐらいにしております。最初から大阪府立職工学校で作ってつかいましたが二円七、八十銭ぐらいと思います。

積んだのをおろす時か、積み上げることのほかは、一切を子どもにさせていますが、たたんだ中へ手を入れて、肩にかけると都合よく運び歩けます。（ずいぶん遠方まで運んで行った記録が回遊の項にありますから参照）

これをいすにして腰をかける時には布を張った木の部分を左右にし、布の部分が前と後になるように置かせて、腰をかけさせると非常に楽なようです。

これをいすにして、別項のかり机に向かわせたらそれで保育室ができるのですが、更に便利な方法があります、それは、このいすを机に代用する方法です。それは別項にある半ござを敷いて、その上に子どもをすわらせ（足を前に投げ出して）その前（足の間）にこのいすを置きそのいすの上へボール紙の板、粘土板のようなものを置けば机になります。

私の園では、回遊の場合（あまり遠くへはいすを持たせませんが）に利用いたします。

**3　運びやすいかりの机**　これは「板」と「馬」とで作りますので、どこへでも運んで行かれます。「板」は長さ六尺、幅一尺厚さ一寸ぐらいでどの園でも大概「板」六枚、「馬」十二ほどを用意しております。

夏などは特に集合所に近い森や林の中へ持って行って、そ

こへすぐさま保育室を作ります。

「馬」を二つ並べて、其の上へ「板」をわたすだけですから、子どもがよりかかったら板が落ちるだろうと心配する方がありますけれど、落ちますから子どもは決してよりかからなくなります。したがって子どもは知らず知らず姿勢が正しくなるようです。しかし心配ならば動かぬように止め木をつけて置いてもよろしいので、私の園でもあるところは其のようにしています。

この「馬」の片方をのけて子どもは便利な滑り台にしたり、木煉瓦を足して一層急な滑り台を創ったりします。また「板」と「ござ」とを混用していろいろのお座敷と板間ができたりします。「馬」もたくみに遊戯道具となって、奇想天外の応用材料に使われます。

**4　木煉瓦をたくさんに**　普通煉瓦と同じ大きさの木煉瓦を百も二百もと、その長さを二倍にしたものを五十か百かと三倍のものを五六十、四倍のものを三、四十でも作って置いて子どもの使用に任せるのです。別項説明の通り実にこの木煉瓦で創り上げる子どもの想像生活の成果を見る時、誰でも驚かないものはないでしょう。

木材の豊富な田舎へ行くほど便利に得られると思いますが、木煉瓦の表面はのこぎりびきのままのザラザラしたのが地の上や土の上で用いさせるにはよいようで、すぐになめらかになります。

「ザラザラで、子どもたちの手がいたむ……」など言った観たちがありますけれども、それは全然杞憂に過ぎなかったことを今日では確証いたします。

土に親ませる子どもへの恩物は、何でも繊細なことばかりを考えて来た机の上の恩物ばかりを標準にしても役立たないことが多いようです。

木煉瓦制作の面白さは別項の愛の日記抄録文を見ても想像ができると思いますが、僅数率によって割り出されている大人の建築用材を単位として、更にそれを幾倍の長さにして見たまでの簡単なものですが、非常に子どもの創造欲をそそるに適した素質を具備しているように思われます。（野の石つめなどにも面白い連絡が見出されます）これを使用させる場合も各自に運び出させ、各自に片づけさせることももちろんです。

**5　半ござと一人ござ**　普通の畳表の大きさをタテに半切したものを「半ござ」といって重宝にしております。一枚に七、八人は尻をおろしていこわれますから五、六枚も用意して置いて、小さい乳母車か何かで運んで行けば、これこそ野の幼稚園にはなくてならぬものになります。

近ごろは、一人一人に持たせる小さな乳母車を作って見て、布袋に入れてめいめいに携帯させて見ています。（中略）

**6　運ばれる楽器**　野へでも林でも運んで行かれる楽器という心配は最初からかなり私を悩ませました。

最初は「ベビーオルガン」を乳母車に積んで出たものですが、「ヴァイオリン」を考えて見たり、「ハーモニカ」を考えて見たりしましたがなかなか困難です。池田では小さな卓上オルガンを車に積んで長らく使用して参りましたが、近ごろでは乳母車の中へオルガンを私が工夫して取り付けて其のまま弾かれるようにして見ました。その上へござも、雑物も積み込んで行きますが便利なようです。

特に私の主張する「家庭めぐり」に必要なもので、昨今、池田の園で非常に喜ばれています。

この他、幼児集合所にはやや大きな、よい音のするオルガンを準備していますができることなら自由に子どもにも使用させてやるため一台ぐらいの開放がしたいものです。（私は日本楽器の連想浄化ができた後、または浄化運動を行ないつつ三絃を童謡に使用する企画をもって今実行しかけています）

**7　簡単な救急箱**　野を歩く子どものためには是非とも救急箱の用意がいります。かばんのようにして先生が肩にかけて行くのもありますが、大概は車にのせて行きます。主な薬品は

●アンモニア（虫にさされた時のため）●ゼルマトール（内用にも外傷にも）●メンソレータム（万能のもの）●アルコール●ほう帯●ガーゼ●脱脂綿●油紙等、このほか注意深くするために加えるものは幾らでもありましょう。

以上はどこの幼稚園でも必要なものですが、更に左のようなものがほしい。

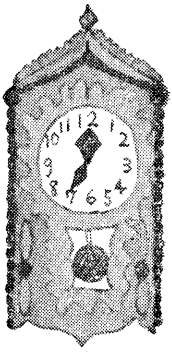
**8　蓄音機と名画類**　（中略）

**9　一般の保育用具**　一般の保育所に用いられている幼児保育用具、特にフレーベル氏の恩物やモンテッソーリ教具などの中から、幾らかのものを用意しておいて、適当な時期にそれを使わせる便宜のあるようにともつとめて来ましたが、かの積木などは三百、四百と買っておいて、それを一度に多く持たせて存分なものを創らせるように仕向けてまいりました。また自然から粘土を取って来て粘土細工をさせたり、木の実や草の葉など（いわゆる自然恩物）によって手技をさせたりするための用具は相応に用意しました。この他、参考書や、雑具やを数えると家なき幼稚園の集合所が、雑具小屋のように見えるところさえあります。

**10　砂箱のご用意**　山や川で自然の砂箱は使わせますが、集合所の附近にも是非ほしいと思います。　（つづく）

# 子どもの生きがい

山野光映



児童科を卒業して十年余りの現在、六歳と三歳の二人の女の子の母親になりました。

子どもは自分で育てたいと、長女出産を前に、五年間の高校家庭科教師の職に終止符をうちました。そのころ〝子どもは四人ぐらい、親は子どもがもって生まれた力でのびのび自然に成長するのを助けて……〟などと思っていたものですが、いつの間にか、子どものちょっとした行動に、喜んだり、心配したり、怒ったりの平々凡々たる親になってしまいました。

児童学を学んだものらしい注意深い観察や記録、分析、考察などからも縁遠くなりました。子どもの側に立って考えようという体制だけは保ちたいと努力してきました。がそれも泥んこ遊びで上から下までどろどろになった姿や、お友だちを大勢連れてきて、ちらかしきった部屋や庭、おもいがけないいたずらなどを見るたび（こうしたことが毎日なのですが）親と子の利害はなんと相反するのだろうと愚痴がでてきます。

そんな日々を過ごす中で子どもの生きがいなど考えたこともありませんでした。それで私にはとても書けませんとお断わりするのが当然と思いましたが、この機会に子どもの生きがいについて考えてみることが、私と二人の子どもたちに新たな一面を作ってくれるのではと、何年ぶりかの文章を書くことにしました。

## 楽しく遊べること

子どもの生活は遊びですから、遊びが楽しいこと・楽しく遊べることが、最も自然に生きがいになるのではないでしょうか。大人でいえば仕事が楽しい・楽しく仕事ができる・ということになると思います。

仕事と違い、遊びは楽しいのが当たり前だといわれそうです

が、私の子どもたちは、それぞれに楽しく遊ぶことがむずかしかったようです。

長女は、親に遊んでもらうことに慣れてしまい、自分一人で遊ぶこと・自分から遊びの仲間に入って行くことがへたでした。誘ってくれる人がいないとつまらなそうにぐずぐずしていました。また自分の家以外では小さくなって遊んでいました。お友だちの間で、自由に自分を発揮して遊びを楽しむようになったのは、幼稚園の年少組も終わりに近くなったころからです。そのころ寝る前によく「ああ、今日は楽しい日だったなあ」といいました。自分の力を思いきり出してお友だちと遊べたことが、快い満足感となって思い出されるのでしょう。こちらが楽しくなるような満たされた顔でした。楽しく遊んで生きがいを充分に味わっていた姿のように思われます。

次女は遊びを見つけだすのが上手です。長女やその友だちが妹の遊びに入れてもらうことがよくあります。友だちを自分の思うように動かす力も持っています。陽気でいつも楽しそうに遊んでいます。

でもその楽しい遊びで毎日失敗しています。今日も、鏡台の前にお人形をならべ、その顔にいただきもので私が大切に使っていた化粧品をペタペタぬっては、金魚鉢の水で洗っていました。そのためか金魚が一匹浮いてしまっているので、あわてて水をとり変えると底から小さなおもちゃがたくさん出てきました。金魚さんのおもちゃにあげたといいます。（この金魚は前日金魚すくいで自分がつかまえたものでした）

こんな時、「あら、礼ちゃん」というとまた悪いことをしてしまったと気づくらしく、小さくなってベソをかきます。楽しさは一度にふっとんでしまうようです。先日「おもしろいことは、みんなママにおこられることだね」と長女にいっているのを聞き、苦笑しました。長時間楽しく遊んでいても結果的に叱られていては、遊びの楽しさを味わって生きがいを感じるにはほど遠いことでしょう。

## 両親や友だちから愛され認められること

長女が幼稚園に入って間もないころ、タイツをひどくやぶいて帰ってきました。ころんだのではなさそうなのできくと「いすにすわっていてつまらないからタイツをつまんでいるうちにやぶれてきた」といいます。動きまわることができず、じっといすにすわって下を向いている娘の姿が想像できました。よく○○ちゃんがいじめるともいいました。自分が使っている遊具でも、元気のよい子が取りにくればすぐあげてしまうという話も聞きました。幼稚園に行くことをいやがりこそしませんでしたが、家ではおこりっぽい子どもになりました。生きがいを失

っていた時だったとも考えられます。

夏休みが終わって、自分が作っていった紙芝居を先生がしてくださり、娘のクラスばかりでなく他のクラスにもまわり、みんな熱心に見てくれたということを聞いてから、しばらくたったころ、「このごろ○○ちゃん、あたしのこといじめるのを忘れちゃったみたい。先生が紙芝居してくれたからかな」といっていました。

夏休みが終わったら何かおみやげを作って幼稚園に持ってくるようにいわれ、絵を書くことが大好きな娘は海行きのことを紙芝居にしたのです。それをお友だちが喜んで見てくれた——小さな体験でしたが、これで自信を持ちはじめたため、自分が変わっていったようです。お友だちの振舞いは本人が感じたほど変わらなかったのです。というのは、そのころ先生が、「最近元気に遊ぶようになって、初めてクラスの中でも勢力のある子とけんかしているのを見ました。言いはることは今までなかったのですが」と話してくださいました。

一月のある日、ほほを紅潮させて、走って帰ってきました。おゆうぎ会で舌切雀をやり、おばあさん役に選ばれたのでした。みんなの推薦できめたようです。「先生が黒板に、みんなからいわれた人の名前を書いて、誰がいいか手を上げたら、あたしの時にあげた人がたくさんいたので、なるかな思ったら、顔がどんどんあつくなっちゃった」とまだ興奮さめやらずの話しぶりでした。

本人が驚いたより親はもっと驚きました。元気になったとはいえ、やはり消極的なおとなしい子でしたから。それで夫とともに心から喜び、ほめました。これが転機となって娘の世界はずいぶん広がっていきました。「あたしのこと好きなお友だちが多すぎて困っちゃう」とうれしそうに話しました。お友だちが自分を認めてくれたという自覚が、生き生きと活動的にして、その結果お友だちがいっそうふえたのでした。そんな姿を見て私も、ぐずで困ると思うことが多かったのを忘れ、顔まで以前よりかわいくなったように思えてきました。親の気持ちを敏感にうけとめて、家でも目に見えてよいお姉さんになりました。

お友だちから、そして親から認められることが五歳の子どもにとって、こんなにもうれしく、こんなにも成長を助けてくれるものだということをしみじみ感じました。今でも幼稚園で一ばんうれしかったのは、たくさんお友だちが手をあげてくれた時だといいます。

## 自分の成長を確認して未来を夢みること

「ママ！　見て！」なわとびができるようになった時、やっとさか上りができるようになった時、一メートルほど泳げるよう

になった時、そしてもっともっとさ細なあれこれができるようになるたび、喜々とした声に呼ばれます。次女はタイツがうまくはけたといっては、はねまわって喜びます。カルタを一枚とっては、ぴょんぴょんとびはねます。その間に姉にたて続けに数枚とられても平気です。こわい犬の前を通り、自動車が走りぬける道をへいにぴったりつきながら、はじめて一人でお友だちの家へ行き、帰ってきた時の喜びも数日前でした。成長の速度が早い幼児期は、こうした喜びに恵まれています。しかもいつも親がそばにいて、一緒に喜んでくれるのですから、うれしさも数倍です。とびはねたり、走りまわったり体ぢゅうで喜びを表現します。

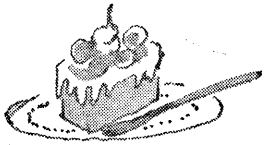
こうして自分の成長を自覚しながら、もっと大きくなった自分をいつも夢みています。長女はドレスを着たおよめさんの絵をよく書きます。すてきにかわいくかけると、それが自分です。そして幼稚園の先生になり広い芝生の庭があるお城みたいな家を建てるのだとはりきっています。散歩の折には場所まで物色しています。次女は「ご飯なんか食べなくていいわよ。お菓子をたくさん食べなさい」といい、子どもがおしっこをもらしたら、だまってとりかえてあげるやさしいママになるといって私に抵抗します。

もっと現実的に長女は、近所の先輩たちに「学校ってきびしいんだよ。宿題もあるし」などと、おどかされながらも入学を楽しみにしているし、次女は来る人ごとに「礼は、さ来年幼稚園」と幼稚園に行ける日をほこらしげに告げています。自分が大きくなって少しえらくなることへの期待と未知の世界に対する夢が実際の生活の中で体験するさまざまな喜びとともに、一つの生きがいとなるのではないでしょうか。

## 気ながに子どもの成長を待つ

子どもが生きがいを感じたであろうと思われることをいろいろと考えるのは楽しいことでした。子どもそのものが生きがいにあふれているような気がしてきます。けれど逆にあの時は生きがいをしぼませてしまっただろうという思いも、はじめて子どもの生きがいについて考えてみて多々ありました。私の期待に子どもの行動がともなわなかった時のお説教の場面が思いおこされます。ゆったりとした気持ちで子どもの成長を待ってあげようとあらためて思いました。生きがいにつながりそうなきっかけを、上手にとらえてあげられるよう、努力しようとも思いました。

# 保育者養成と児童文学



鈴木都志子

「母親の愛情というものは……」例によって私の授業は、話がはずんでくると余談になっていく。

「…宇治拾遺物語だったか、民話の中にこんな話があるんです。成長して山へ仕事に行った息子が、木の上から自分をおそおうとした鬼の手首を切り落して、難をのがれ、わが家にたどりついてみると、自分の母親が、手首を切り落とされて、ウンウンうなっていた。母親は、鬼と姿を変え、成長してわが手元から離れようとしたわが子を、とって食おうとしたのである……」

とその時、教室前方の学生が、「こんなの児童心理学じゃない」と、言ったのである。私は少なからずショックであった。思えば、私たちは、高校でも大学でも、先生が興にのって話してくれるいろいろな話を、これは教科書にのっていないとか、教科書の内容以外であるとか思ったことがなかった。それどころか、授業中おもしろかったのはそんな話であり、いつまでも心にのこって、いまだに覚えていることは、そういういわゆる余談なのである。年配の教授が、「ぼくたちはもう新しい研究はできない。そのかわり、今までの自分の成果をいかして、教育に没頭する時がきた」と語ったり、「年寄りを批判し、それを否定することはやめてくれ。年寄りにとって、自分の現在を否定されることは、今まで生きてきた自分の生涯を否定されることなのだ」と述懐したりしたことが、ノートなど見返す必要もなく覚えていることなのであり、自分が人生の難問にぶつかる時、しみじみ思い出されてありがたいと思うことなのである。学生たちも将来保育者になった時、教科書にとらわれない思いがけない課題に、いくらでも遭遇するのである。私も、三つの子どもに、むずかしい図鑑を持ってきて、「これ、読んで」とせがまれたこと

がある。はてと困ったが、開いたページに朝顔の花の種類が図解してあるのにヒントを得て、「朝顔の花が、一つ二つ三つ咲いていました……」と急場しのぎのお話を作ったのである。こんな時、あの授業中に、「こんなの児童心理学じゃない」と、つぶやいた学生ならどうするのであろうか。むずかしいまま、子どもの指さす箇所を読んでやるのだろうか、それとも「こんなの読むの、これ、あなたにはまだむずかしいわよ」と一蹴してしまうのであろうか。その時、その三つ近い子どもは、むずかしいのも知らず、その重い図鑑を一生懸命にかかえてきて、目を輝かせて聞き入っていたのである。

このことは、本に限らず、子どもと遊んでいるうちに、会話の中にいくらでも出てくる問題なのである。丘に登って、向い側の連山の一角からたちのぼる一本のけむりを見つけて、「あ、ゆげが!!」と叫ぶ子に、「ゆげじゃない、けむりよ」と問い正すのであろうか、「かよちゃんのママ死んじゃったのよ。皮はゆげになって、骨だけになったの」という話に、「ゆげじゃない、けむりよ」と笑うのであろうか。子どもの心の世界、子どものお話の世界を、もっともっと大切にしてあげたい。そのためにも、保育にたずさわる者は、広やかに、想像の世界へ、創造の世界へ、はばたく心を持たねばならないのである。そのためには、児童文学が、大きい役割を持っているのではなかろうか。児童文学とは、児童だけが読むものではなく、子どもに接する保育者みんなが読むべきものではないだろうか。

こんなことを言いながらも、私も先日、失敗したばかりなのである。それは、山の湖のそばに建てられた、不動明王のことである。一緒に遊んでいた子どもが、「こわいじいちゃんのいるところ」と言って、よりつかなかったのが、気が変わって、一緒にその不動明王の建ってる場所へ登って行くと言いだした。機を得たり、と思って連れて行ったのであるが、こわいじいちゃん、こわいじいちゃんと連発されて、ついに、その子にのぼらせて、不動明王が石であることを、さわらせて、教えてしまったのである。その子は、前日、自分の持っていたビスケットを、「こわいじいちゃんにあげる」と言って、不動明王にそなえたのである。「なかなか食べないねぇ」と言っていたが、遊んでいるうちに忘れてしまい、あくる日、また不動明王にのぼった時、夕べのうちにのら犬でもやってきたのか、なくなったビスケットにおどろいて、「また、こわいじいちゃんにビスケットあげよう」と言って、またビスケットをそなえたのである。そこへ私はさわらせて「ね、石でしょう」と教えてしまったのである。現代、子どもたちが妙に子どもおとなみたいに、しっかりしたことをし

ゃべる裏に、私たち周囲の大人が、変に知的な面ばかり、ほりおこしている誤りが、あるのではないだろうか。

大人にとって、何でもないあき地が、子どもにとっては、すばらしい広っぱであるように、大人にとっては、都会の騒音に疲れた目に映るから美しいれんげ畑が、子どもにとっては、限りない遊びの広がるお花畑であり、夕暮れの紫色の薄明かりの中でも、まだじっとすわって、お花つなぎに夢中になっている世界なのであり、その経験が、美しいお花畑にみとれて、空から天女がおりてきて、その七色の羽衣が花畑の上をヒラヒラと舞うというお話に、夢中に耳かたむける、ころの基になっていくのではないだろうか。そういった基礎を、子どもの経験の中に組み入れてあげたい、そして、その上に、美しいお話を、たっぷり与えてやりたい。

これらは現場の保育者には、わかりきったことかもしれない。しかし現代の学生たちに、単位さえとればという風潮があり、その風潮は保育系の学生の中にも現われてきていることを思う時、私は悲しいのである。

子どもと遊べば、大人からみると、奇想天外ともいえる出来事に遭遇する。そして、なるほど、と感心したり、その発想のおもしろさに楽しくなる。湯をわかしているヤカンのふたは、「空とぶ円盤だあー」という声とともに、サッと持っていかれる。こちらは熱くなかったことに胸をなでおろす。太い針金を丸くしてできたなべすけは、たちまち車のハンドルになり、半日中それをまわしたりもどしたりしながら、「ブーウー ブーウ」と走りまわる。そして車は、雨でスリップならぬスリッパするのである。また、すべり台の階段をのぼりつめれば、そこは、たちまち飛行機の世界になり、「行ってきまーす、バイバイ」と、その子の世界にとって一番遠い大阪にでかけることになるのである。なるほど、あのすべり台の階段と屋上のつくりは、飛行機のタラップに似ているなあと感心している間もなく、私は、「行ってらっしゃあーい」と叫んでやらねばならないのである。すると、子どもは喜々として遊園地を一周して、全く同じ道をとおって、「ただいまあ」と笑って帰ってくるのである。また、青いペンキも真新しい遊動円木にのっても、それは大好きな「赤いバス」になるし、すべり台も、四、五人でそろって、ワーイとすべりおりれば、そこは特急電車の世界なのである。

この、子どもたちのお話の世界に一緒に入っていき、さらにそこで子どもの心を伸ばすような方向で、新しいものを子どもと一緒に作っていくには、保育者が、児童心理を勉強したり、子どもに接するだけでなく、この想像的で、創造の世界、つまり児童文学に多く接することが必要なのではないだ

ろうか。それは、もっと日常の出来事としても、職業についてからは、なかなかゆっくりと時間をかけて、多くの児童文学を読むことのむずかしいことを思う時、学生時代に、できるだけお話をたくさん読んでいれば、そうすれば、たとえくわしい話は忘れても、あ、あんな話があった、あ、ここではあんな話がいい、とちょっとさがしてきて本を読んでやることが可能になるのである。

次に、現在まだ予備調査中のものであるが、ちょっとその中から少し気がついたことを述べてみよう。その調査の中では、子どもたちに、昔から語りつがれたおとぎ話を知っているか、誰にお話してもらったかたずねてみた。それから、みにくいアヒルの子とシンデレラ姫も同様にたずねてみた。緊張して答えない子どももあるので、いちがいにきめつけられないが、みにくいアヒルの子を知らないという子が多かった。なるほど、現在は、あふれる創作児童文学の中で、保育教材も、アンデルセンなどの古典は少なく、古典が子どもたちに与えられる場合でも、原作をアレンジしたものが多い。こういう昨今、保育者自身子どもとの対話の中にはぐくむお話の世界を、大切に育てることが問題であるだけでなく、保育者が、子どもたちに与えるお話を選択するということが、重要なものとなってくると思う。保育者が、どんな教材を選んであげるか、現在ではその選択は、保育教材の製作スタッフに任せられているかもしれないが、その現状の中でも、毎日のお話のために、保育者自身が内容を選べる余裕は、まだあるといえよう。その選択がより望ましいものになるためにも、保育者の卵に、たくさんのよいお話を読んでもらいたいのである。

ただ、テレビの影響は、かなり保育者の手の届かないところに存在している。先のお話にしても、テレビを介してみることは多く、そこでは同様に、古典物が与えられるとしても、アレンジされている。ときには、輝く竹をわるコマーシャルから、かぐや姫を知っているという子も出てくるだろう。私は常日ごろ、テレビの子ども向け番組をみながら、スタッフは実に子どもの興味を知っていると感心するのであるが、それが、ただ関心をひくためだけの児童理解だけに終わらないよう願うのである。先の調査で、子どもたちに、一番好きな古典と、テレビで好きな番組を比較して、どちらが好きかと問うと、全員がテレビの番組の方を好きというのである。そういう回答が出る理由には、テレビは、毎日、あるいは毎週みるという頻度の多い経験で、印象は強められ、経験の機会も、テレビの番組の方が、質問時に近いこともあるであろう。テレビ番組が好きという理由には、そういう要素も

入ってくるであろうが、毎日の保育の場で、昨日見たテレビの場面を再現して、喜々として保母に話し伝える姿や、園児送迎バスの中で歌う人気番組の主題歌の合唱を思い合わせる時、テレビの影響力の大きさを痛感せずにはいられない。それは何も、テレビは悪いときめつけているのではなく、たとえ大人がまゆをひそめる番組でも、子どもは無邪気に見ているので、大人がまゆをひそめるのをみて、初めてその悪い面を誇張して感じるといえる。そこで、テレビの視覚的な面でのすばらしい表現力を思う時、テレビの製作スタッフに、むしろ積極的に、もっともっと子どもたちを、すこやかにはぐくむ姿勢になってもらいたい気がするのである。ところがそういう番組はあっても長く支えられず姿を消していくように思える。

同じ調査で、古典の中ではどれが好きかという問に、シンデレラという回答が多かった。私の批判がましい心は、シンデレラに人気があるのは、現代の一獲千金的ちかみち反応に通ずるものがあるのでは、と疑ってみるのであるが、この、各国に多く生まれ伝承されているシンデレラ説話は、それだけ子どもたちをひきつける、大きな魅力をもっているのだと考えなおしてみたのである。子どもたちは、シンデレラ姫をかばって、かぼちゃをきれいな馬車に仕立てた魔法使いのおばあさんに会いたいと言う。この童心を育ててやりたいと思う。たとえ成長するにつれ、形が変わっていき、もはやそんな夢は考えなくなるとしても、その童心の基本にあった、美しい心は、成長しても、ある時はやさしく、ある時は暖かく、人々に接する人間になる基になることであろう。アメリカ軍のミルクを飲み、作業がよくあった戦後育ちの私たちでさえ、現実的で、打算的で、わがままである。それがもっと現在のように、運動場の草取りも親にさせて過保護に育っている三十年、四十年生まれの子どもたちを思う時、将来を憂う心を支えてくれるのは、子どもたちの時期に与えるお話の世界が、その子の心の柱になってくれるという信頼である。心の柱になってくれるかどうかという事実追及より、なってほしい、なってくれるのではというかすかな頼りに寄りかかった全面的願望である。それがパンドラの箱のお話にある希望というものかもしれない。

単位さえとれればよいという現代の学生の風潮の中で、保育系の学生だけには、そうはなってほしくない。学生におおいに美しい童話や児童文学を、たくさん読んでもらいたいと私は思う。

（静岡県立厚生保育学院）

◇講演◇

# 「幼児との教育」の中で学んだこと

## ――教師も幼児と共に成長しているだろうか――

河辺　杲

**・はじめに**

この時間では、幼稚園生活における私の心に残っていることのいくつかを、少し申しあげてみたいと思います。いまは大津市の教育研究所に勤務しここでは幼小中の先生方の現職研修全般の問題ならびに教育相談の仕事をおもに担当しております。さらに市教委に十三年勤務し幼稚園教育を担当してきた経験と、六年間幼稚園にいたという立場から、今やかましくいわれております幼児期の教育のみでなく、もう少し小学校低学年も含めての幼年期の教育の問題について少しずつ、いろんな角度から検討するということが、私に課せられておりまして、これらの仕事をやり始めております。でも、一日も早くもう一度幼稚園の生活に帰りたいという気持ちが現在の私の中にまだむらむらとしております。なぜそういうふうに幼稚園の生活に未練を感じているか、ということが、これから申し上げるいくつかの話の中で、皆さんに感じていただけるのではないかと思います。

**・子どもは毛穴で感じとる**

まず一番初めに皆さんに申し上げたいことの一つは、幼児と接していて、本当に「これが人間味というもの」ということについてしみじみと見せつけられたように思うことです。もっとちがった言いかたをすれば、いま大人が失いかけているような「人間性」――私は「人間味」と言いたいんですけれども――そういうものを再発見したとでもいいましょうか、そんな所が私が幼児から学んだ一番印象深いことの一つです。

その具体的なものの一つとして、幼児は、身のまわりにいる人とか、物に対して、毛穴で感じとっていると言ったらよいような点にしばしば接することができます。

たとえば、私がちょうど園長になって間もないころのある日、私が廊下を歩いていますと、背後からトコトコという足音が感じられたものですれから、ふと振り返ってみますと幼児たちは互いに顔を見合わせて笑っています。よく見ると上靴をはかないでい

ることがわかりました。「はき物をはかないでどうしたの」と聞くと「園長先生また下へ降りるでしょ」と言うんです。その時私はハッとしました。私のあとをついていながら私の行動をずっと見ていたのだということを知り（別に悪いことをしたおぼえはないのですが）ゾッとするものを一瞬感じました。しかしその瞬間私は「これ上靴なのだよ」といってしまっていたのをおぼえています。それは、その時の上靴はちょうどカーシューズのような黒い靴で、子どもたちに下靴のように見られているかもわからないと感じたからです。しかし幼児たちのニコッとした笑顔がかえって来ただけで、なにか自分がひとりで勝手に一生懸命に自己防衛しているのがはずかしくおかしく感じられました。さらに次の瞬間、ひょっとするとルールがわかっていないのではないかということがひらめきました。

ところで私の園には、中庭にままごとあそびのできる小さな家があり園舎からこの小さな家に行く通路が二方にあって、その通路がコンクリート敷で一方の通路は屋根がついていないんですがもう一方の通路は屋根がついていて、いわゆる渡り廊下のようになっております。この両方のコンクリートの通路だけは上靴でもいいことにしてあったわけです。入園後すぐに子どもたちにもこのことはよく知らせてあったはずなのですが、まだ充分徹底しないのだなとも思いました。そして「園長先生また降りるんでしょ」といったのは、園長は同じ靴のままで中庭に降りたり廊下にあがったりしているというようにききとれもしました。園長のあとを追って歩こうと思えば、上靴にはきかえる間がないわけです。だから下靴を後ろに持ったまま素足で廊下を歩いて私のあとをついてまわり、また私が中庭に降りれば、すぐ下靴をはいて出ようと思っていたらしいのです。その時にはぴんとこなかったのですけれども、あとでよく考えてみましたら、いろいろの園生活のルールがどれほど子どもたちに徹底しているかということもさることながら、非常に子どもたちは私たちの気がつかないでいるところで、行動を見て感じとっているということつまり、この毛穴で感じとっているとでもいいたいようなものは、こんなことをこのように経験させればよいと計画的意図的に教えようとしている以外のところに、案外たくさんあるということをまざまざ幼児から教えられたといってよいでしょう。なおこの時「ルールがわかっていないのではないか」などと指導内容なり形式的なしつけそのものにこだわらずに「園長のあとをついてまわりたいのだな」となぜもっとすなおに子どもたちの心を感じとれなかったかと自分の感受性の訓練をもっとしなくてはと強く感じさせられました。

こういうことがほかにもまだまだたくさんあるわけです。たとえば、先生たちが気になると言われるような子どもの中に、とっ

ても自閉的な子や、また毎朝のように先生の髪の毛を引っ張って、ぎゅうと握った手の指の間にはいつも三本ほどの髪の毛がついているというような乱暴な行動をする子ども、朝早く来て、先生がおはようと言う前に先生の手のところにかちっとかみついて先生の腕には必ず毎日歯型や爪の跡がつくような子どもなどがいました。そういう子どもを、先生たちがどうしていいのかわからないで四苦八苦しながら指導の工夫をされているのを見て、私なりに側面からこれに協力しようと職員室の一隅に、少しプレイルームのようなコーナーを作って、そこに刀だとかピストルだとか、そういう普通の保育室には置かないような攻撃的な遊び道具などを置いて、これらの子どもたちが私のところで遊びたいと思えば自由に遊べるように準備して、大体一時間ほど一緒に遊んでその中で治療保育のようなことをしていたわけです。

ある日、時々園長室に遊びに来る年少のH児が「あの園長先生のところへいくとおもしろい怪獣やら、それから仮面ライダーのような人形だとか、刀だとか、保育室にはないようなものがたくさんあるよ。」というのでひとりの友だちを連れてやってきました。私もその時「一緒に入れてやろうかな」と思ったのですが、それをやりますと誰でも入れるということになって、とても部屋の中が混乱するだろうというふうに感じたものですから、「ここはね、いまはH君だけ遊んでもらうが、もう一人のお友だちはね、この廊下で待っててもらおうね。お部屋のところに帰ってH君がまた出たら一緒に遊ぶよと言ってちょうだい」と言ったんですけれど、なかなか帰さないんです。私がそのように友だちの方に話をして職員室のドアを閉めましたら、H君はそのドアーを少し開けて、そこからのぞいとれというわけで、自分が中にいる間廊下に友だちを待たせておくわけです。そして自分がかえるをたくさん入れて持っていたあきかんを友だちに持たせて、それの番をさせているわけです。ところがそこを少し開けておきますと、またガラガラッとだれかがのぞきに来たりするものですから「ちょっとね、外で待っててほしいから」と言って私がドアーを閉めて戻ってくるとH君の「園長先生のけち！」ということばが強くはねかえって来ました。「けち」ということは「もう少し見せてやってもいいのに」という私の考え方ややり方に対する反抗だったと思うんです。何か、ぴーんと子どもが感じるものに気づきました。そういう点から幼児というのは理屈ではなく、本当に常に全身で感じているのだ、ということを思うんです。

よく世間でいわれている「あの人は今何を考えているか、何を感じているか、私はすぐ当てることができる」というような非常に感受性の鋭い方がおられるようですが、だいたい感受性というのは、ある程度トレーニングしないとだんだん涸れていくとでもいいましょうか、あるいは心が自由に動かないで固まってしまっ

て感じることがにぶくなるように思うんです。がん固おやじと呼ばれる年齢になってくると、どうしても感受性がにぶくなってしまいます。そういう点で幼児というのは、いや人間は生れつき健康であれば柔軟でそういう感受性に恵まれているのではないかと思います。ただ、そういうものが涸渇しないように、自分である程度いろいろな機会をとらえてトレーニングしているのでしょうけれども、一般に教育の中でそういうようなものは身につけさせていくとか、豊かにしていくというものではなく、本来持っているものを絶やさないようにしていくことが、教育の中核ではないかなということを多くの機会に感じさせられました。たとえばこういうこともあります。皆さんが現場に出られて、きっといつもとちがった新しい装いで保育室に行かれると「先生きれいな服きてきたね」とすぐにぴんとくるわけです。それはけっしておしゃまさんでもなんでもないんです。そういう点の容姿の変化というものに非常に敏感に反応をしているわけです。そういうことから言って、常に何か見ているといいますか、常に感じているということをおそらく皆さんもすでにいろいろなところで経験されて感じておられるだろうと思います。このように考えてくるとほんとうにこわい感じがする時があります。幼児教育の中でこの幼児たちの感受性の発達を阻害してはいないでしょうか、私たちは人間味の核とでもいったような感受性をほんとうに育てているでしょうか。もう一度このことについてしっかり考えなおしてみたいと思います。またこのような感受性豊かな幼児たちに応じていくためには、どうしても私たち教師が自らの感受性を訓練していかねばなりませんが、自己の感受性についてどこでどのように自己訓練をしていますか。またどのような感受性を現在もっているか教師自身ご存知でしょうか。幼児と共に育ちたいものです。

**・内的動機〝やろうとする意欲〟を尊重する**

人間味を再発見したもう一つの面というのは……。現場に初めて出られた先生がよく次のようなことで私の所へ相談にこられるのです。「幼児たちのそばへ行くと、すぐ子どもたちが逃げてしまう。どうしたらいいのかわからない」と、つまり「どうも隣りの先生はうまくやっているのだけれども私がそばへ行って遊びの中に入ろうとしたり、何か言ってあげようと思って行くと、さあっといつの間にか子どもたちはそこにいなくなってしまっている。そこでいろいろやってみるがよい方法がみつからないし結局どうしたらいいのかわからない。」と、こう言った悩みが最初あるわけです。私がそういう時によく言ったことは……「いろいろやってみましたか」ってきくと「いろいろやってみました」という答がかえって来ます。

「じゃあ、先生ひとりで遊んでみるということをやってみました

か」って言うと「それはやっていない」というので、「それではいっぺんそれをやってみたら」ということで、さっそく先生のひとり遊びが始まるわけですが、そうするとほとんどの場合その日の放課後には「園長先生、きょうひとりで遊んでいましたらたくさん寄ってきました」という報告をきくことができます。先生がひとりで遊んでいると子どもは寄って来るんです。

これはどういうことかと申しますと、私たちの「教育する」という考え方の中には、外から相手を動かそうとする。つまりよく言われる「動機づけ」（モチベーション）というものが外側からばかり刺激するということのみに終始してしまっている。

ところが現在の教育を見ますとこのような動機づけが、一般の教育の考え方のなかに非常に強いわけです。しかし子どもが自分で――内的動機ということばがありますが――本当に内面からやろうという、そういう意欲によって動きだすことが、たくさんあるわけです。むしろ人間味というのはそれじゃないかということをそこで考えざるをえないわけです。幼児というのは自らで成長しようとする生命力と言いますか、そういうものが非常にあふれているんです。ある人はそれを衝動とか、欲求とか、言っていますが、何か衝動といいますと衝動的とか何とかであまりいい場合には使われないのでよいようには聞こえませんけれども、私はとっても大事なことだと思います。「よしやろう」とか、「何とかしたくてしょうがない」とむずむずするというようなものは、確かに生命力だと思うんです。あるいは成長する力と言ってもいいと思います。

そういうものが幼児にはちゃんとあるということ、もっと言えば人間にはそういう成長する力があるんだということが幼児を見ていると大へんよくわかります。

ちょっと脱線しますけれども、皆さんは、けがをされたことがありますか。もし大きな傷で傷口がぱっと開いているときは、とても家では処置できなくって、お医者さんに行って治療してもらいますね。消毒してもらって縫ってもらって、その時はお医者さんに治してもらおうと行くわけですね。ところがよく考えてみると、お医者さんのされる仕事というのは、ばい菌が入らないように消毒したり、その傷口がふさいでいくのを促進させる手助けをしてくれただけです。「お医者さんに治してもらった」と考えますが、なるほどある意味ではそう言えるわけですけれども、本当は自分で治したという事実があるわけで、言いかえれば「これは人間の中にある生命力が傷口をふさいだのだ」ということになるわけです。ところがお医者さんは自分で治そうとするのを手伝ってくれたのだと、そういうふうにはなかなか考えない。そういうものがたくさん、幼児たちとの接触の中で「これだな」と感じさせられます。私たちはもっともっとそういった内的動機といいます

か、子どもたちがやろうとする意欲といいますか、そういう力を見失わないようにそれを信頼して子どもたちに接触していかなければならないと思いわけです。このように何か私たちが見失いやすい所をもっと幼児と接することの中で見つけていきたいと思います。

成長する力といいますか、生命力という力がひとりひとりの子どものなかにどのように充実して来ているかを見ることと、同時に内にひそんでいるそれらの力を充実してくるようにふんいきをつくっていくことが教育の本質的な仕事だと思います。

**・子どもの未熟さを肯定する—成長しているから未熟なんだ—**

三つめは、子どもというのは成長を続けていますから、成長をつづけているということは未熟であって、そして、下手くそだと思うんです。ところが、どうも大人はすぐに上手にやってほしいと願うわけです。文部省のだしている指導書の中でも上手という言葉が、ところどころ見られて、技術的な面が強く出すぎてはしないかと感じるのですけれども。

たとえばこういうことがあります。入園間もないころにブランコに——ブランコとか、すべり台という遊具は遊園地とかそういう所で充分遊んでおりますから、幼稚園に入ってきてもこれなら遊べるというわけで、すぐにそういう所へ飛んでいくわけです。でもまあ入園間もないころというのは、すべての子どもがみんなスムーズに動けるかというと、そういうわけでもないんですけれども——ある金時のようないかつい子どもが乗っていたんです。そうするとだんだん「ぼくも乗りたい」「ぼくも乗りたい」という子どもが出てきて、これは当然ですね。慣れてきますとそういう時にはどうするかと言いますと、すぐ担任などの先生の所へ助けを求めに行くと言いますか、

「先生、ぼくも乗せてほしい」とか「乗りたい」と言って先生になにがしかの助けをもとめに来ます。なかには「先生、乗せてくれはらへん」とまあこれは関西弁ですけれども、乗せてくれないということを訴えに来るわけです。そうすると先生は合言葉で、そういう時にはおいそれと出ていかないことに、私のいた幼稚園では先生同志の約束ができていたわけですね。高い保育料を払っているのに、ここにいる先生はえらい面倒くさがっていて冷たい先生たちばかりだと親たちが見たら言うかもわかりません。

しかし先生方はすぐおいそれと助けてくれない。そうなりますと、私のいた幼稚園では男の園長だし、まためがねをかけた園長だからあの園長に言えば、たぶんでてきて何とか助けてくれるだろうと言うんで、四月の下旬から五月の上旬ぐらいになると、たくさん私のいる園長室のドアのところを、ガラガラッと少し開けてはのぞき込むわけです。「園長先生」と言うものですから、「何

だい」と言うと「先生、ブランコ乗せてくれはらへん」と言うわけです。「あっそう、ぼくはとってもブランコに乗りたいんだね」って、そういうふうに乗りたい気持ちはすぐくみますけれど、おいそれとは行かないんです。

しかし、切々としたような目つきで眺められると、私もやっぱり心を動かさざるを得ない時が時々あるわけです。「ぼく、どうしたらいいの」と聞きかえしてみると「言っただけでもういいんだ」と言ってそのままだっと走っていく子がいるんです。このようなときは「ききかえしてよかったな」と思うんです。そこが教育のみそみたいなもので、私はほっておく気はしないんです。後をそっとつけて、どうするかを見にいくわけです。運動場へ出るか出ないうちから「園長先生に言ってきたぞう」って言ってるわけです。これはもっと小さいころに、お母さんに言ってきたとか、うちのお父さんに言ってきたと言ったら大きいお兄ちゃんが乗ってたのが、とたんに降りたという経験があったのかもわかりません。言ってきたというだけで安心している子どももあるわけです。それがおどしになっているみたいですね。それでもなかなか乗っている子は降りようとしない。悠々と乗っている わけです。

何人かそういう乗りたい子どもが囲りを取り巻いていまして、やっとしてからとうとうその中のひとりが「ぼくも乗せてくれ」と言うことを、そのひとりで乗っている子に言ったわけですが、これがとても私は大事だと思うのです。乗っている子どもに自分の気持ちを伝えるという、私たちからすれば非常に簡単なことのようですけれども、その第一声がなかなかでないわけですね。先生に訴えたり、親に訴えたりすることはできるけれども、知らない友だちになかなかそれができない。ところが一人が言ったぐらいじゃなかなか降りる子どもばかりではない。何人かが「ぼくも乗りたい」「ぼくも乗りたい」と言って、やっとその子どもはしかたがないので降りたんです。降りたところがやはり自分はもう少しながく乗りたい。そこであるルールを考えつきました。「お前一番、お前二番、三番」と先生より上手に並べて、「お前から乗れ」と命令的に乗せるわけですね。その時に「数えるから、数えたら交替しろよ」って言って、友達が乗りますと「1 2 3 4 5 6 7 8 9 10、はい交替」「1 2 3 4 5 6 7 8 9 10はい交替」早口で数えるように言ってるわけですけれど、いよいよ自分の番になると「1・2・3・4・5・6・7・8・……」と、ゆっくりゆっくり数えているわけです。どうするかなと思っていたんです。おそらく何か変だなと思ってはいるでしょうけれども、それをどういうふうに言ったらいいのかわからないんでしょう。そのうちにその中の一人がやっと「お前、おかしいじゃないか、おれたちが乗る時は早く数えて、自分が乗る時はゆっくり数えるじゃないか」

っていうんで、その子はやっと自分本位のルールを修正していかざるを得なくなったわけです。こういうふうにして、ルールはできるんですけれども、全く自分本位のルールですね。でもルールによって若干相手も認めているわけです。しかしそのルールはとても下手くそです。おそらく大人がはたから見ておったら「この子は大きくなったら恐しい大人になりはしないか」というようなことを思うかもわかりませんね。

ところでこういうふうにして成長していくのだということは、未熟さからだんだんそれが修正されていく。それは先生によっても修正されますけれども、こういう友だちによって修正されるという場合がたいへん多いし、このことがまたとても大事なことだと思います。

あるいは、こういうことがありました。砂場で、五、六人の子どもが土手のようなものを作りました。そこに水をいっぱいいれて遊んでいたんです。ところがその、いつもどっちかというと、いやがられている子どもですけれども、その子がだっと走って来たかと思ったらその土手のところをじゃっとふんで、ぱっと風のようにどこかへ走り去ったのです。そこでどこにいるかと思ったら、運動場の角の方の小高い丘の上で、その後、事態はいかがなりやというようにじっとこちらを見ているわけです。

「先生！　先生！」って砂場の子たちは呼んでるわけです。先生は何事かと思って走って行きましたら、「Oちゃんがこういうふうなことやった」水がだっとそこからあふれているんですね。みんなで土手をなおしながらあふれ出る水を押さえようとしているわけです。やって来た先生がふと見ましたら、小高い丘の上に、おそらく先生から呼ばれるだろうというので、何かこうおかしな目つきで見ているわけです。このような場合、先生はその子を「ここへちょっといらっしゃい」と呼んで、その時に「どうしてふんだの」と聞くのはまあ普通ですね。でも、もうちょっと慣れてくると、「どうしてこんなことしたの」とは聞かないで、「ぼくは何がしたかったの」というふうに受け止められるようになってくると思います。

この時の先生は非常に慣れた先生で、「ぼくはどうしたかったの」って聞いたら、「砂場のここでいっしょに遊びたかったんだ」と言うので先生が、「この人みんなと同じことがしたいというていやはるから、仲間に入れてあげる？」ときかれると「いやだ」と即座に子どもたちが言うんです。「いつもいたずらばかりするし、今もこんなことやったから、そんないたずらをする子は入れないよ」と言うわけです。そこで更に先生が「ぼく、どうしたいの」ってきかれたら「ここの所に水をざっと出してダムみたいなのが作りたい」と言うんです。「ここにダムを作りたいといっているんだけれどダムのお仕事この人にさせてあげてくれない？」

って言ったところが「いやだ」って、どうしても受け入れない。「じゃあ、どこだったらいいの？」ってきかれたら「ここならいい」とその中の何人かが場所を指定してくれて、やっとその仲間に入れてもらうことができたわけです。

でもまあよく考えてみると、本当に仲間に入れてもらえたかどうかということは、その後の人間関係のようすを見ていないのでわかりません。「先生がああいうふうに言ったから、しかたがないから、ここでやってもらっておこう」というようなことだったかもしれません。どうやら、本当には仲間に入りきれないものが残っていたようですけれども、しかしまあ先生というのはこんなふうに子どもによっては職業安定所のようなことをしなければならない時もあるわけです。言葉が充分伝えられない、この伝えられないところでいわゆるいたずらのような結果が生まれているわけです。いやなことをやっている中には、「いやだ」「この人はいやなことをする」と訴えてくるような事件の中には、たいへん伝えることが未熟なために、相手に対してそういういやな思いをさせていることも相当多いように思います。

いつか私が廊下を歩いておりましたら、これは男の子ですがね、「園長先生、この人しつこいんだ」って言うんですね。ふと見たらかわいい女の子が、はたにべったりくっついているわけです。私は少し羨ましいなあと思いましてね（笑）こんなに好かれたらいいなあと思ったんですけれども。その子がしつこくて朝からつきまとわれているものだから、思うように遊べないんで、私に訴えたようです。

そういうような子は自分の思いや考えなどを他人に伝えることが未熟なために、サインのおくり方がつたなくて他人にきらわれたり、他人からいたずらだと言われたりしている場合が、たいへん多いように思います。

そういう所は皆さんから見れば、たいへん下手に見えるでしょう。でも私は、その下手なことをまず肯定してからかからなければいけないと思うんです。それをはやく上手にさせようとか、「どうしてそんな簡単なことが言えないんだ」なんて思うと、とっても子どもには耐えられないほどの目に見えない圧力のようなものになるわけです。私はむしろ—大人でもそうだと思いますけれども—未熟だということ、自分はまだ下手くそだということは、成長しつつあることなのだと思います。どうか皆さんもまだ未熟だと思われたら、私は成長しているから未熟なんだと思ってください。

**・自己主張と思いやりのバランス**

四つ目に申しあげたいことは、先ほどのブランコのことと一緒のようなこととなるかもしれませんけれども、これは私が長い幼

稚園生活の中で本当に感動した一つの事柄なのです。

私たちが幼児教育をやっているなかで、この衝動とか生命力とか、成長する力というものを、いわゆる自己主張とかまたは自己実現と言ってもいいのですが、自分のイメージを現実化していくような方向に育てていくことは大へん大事なことだと思います。でも、自己主張、自己実現だけでは足りないんで、やっぱり他人への思いやりというものが、それに呼応して出てこなければいけないと思うんです。

先に申し上げたブランコのルールの問題でも、そこで感じてくださったと思いますが、「いつまでも自分は長く乗っていたい」という自己があるんですね。乗りたいという自己がありながら、やっぱり他にも乗りたいと思っている友だちがたくさんいるわけなんで、それをどういうふうに位置づけていくか、またこの強い自己主張と、思いやりとのバランスがどのように育っていくかということがとても大事なことだと思うのです。そういうことを、幼児たちはスムーズにやってのけることができるのだということをいろいろな所で感じます。

一般にはまわりに対して調和していくような、また適応していくようなことが、たいへん考えられておって、その中で思いやりなどを自覚していくのだという考え方がたいへん多いみたいですね。でも私は、そういう二元論ではなく、先ほどもブランコの事例で申し上げたように、自己主張というものをやりながら、その中で思いやりといったようなものを、自分でバランスをもってやっていこうとしているように思えます。そういうものが見られて、よく一時は、自己主張なんてものがそうとう強くでてこなければ、思いやりなんてものはでてこないんじゃないかと思った時があります。

ある心理学などの発達なんかの中でも、そういうふうに説明されている向きもありますけれど、私は現実の子どもたちとの接触の中で「自己主張というものが、なるほど、しっかりできるということは、大事なことだ。しかしそのこととやはり相即して、思いやりといわれるものが芽生えて来ている」と感じました。ただ私たちは、自己主張の方はたいへんよくわかるんですけれども、思いやりの方は、なかなかその芽生えがつかめないんです。そういう所を、今まで見のがしていたんじゃないかと思います。

幼稚園の生活の中で、「ままごと遊び」というのは、ごっこの中でも一年を通じて子どもたちが喜んでやりますし、その中でいろいろな経験をするわけですが、やはり入園して間もないころには、ちょっとおしゃまさんのような女の子がいちはやくままごと遊びをします。私は教育委員会で指導主事をしておりました時も幼稚園に出かけていってその場面を見ておったんですけれども、あまり気がつかなくて、ままごと遊びよりは、人形遊びの方が主

かなと思っていたのです。現場に出て、子どもたちと毎日のように接しておりますと、そうじゃなくて、ごちそう作りの方に、どうやら一番子どもたちの興味や関心が強いように思われました。で、ままごとコーナーで、そのようすを毎日のようにずっと見ておりますと、毎日だけでなく、毎年のようにでて来る問題は、そのごちそう作りの時の包丁をめぐっての問題です。朝八時ごろには女の子が何人か来て、せっせと遊んでいるので何をしているのかなと思い見てみると、ごちそう作りを始めているわけなんです。そのためにだんだん早く来るようになったので、先生が来ないうちに来てけがでもされるとこまるということで、登園時刻を八時半に制限しました。そうなりますと、来るのがだいたい一緒になるので、テラスの所でかばんをはずしながら、「うち菜切り包丁」って言ってるわけです。「ほあん、菜切り包丁がほしいんだな」と思って見ていますと、勇敢で元気のいい女の子が、かばんをまだ自分の身体からはずすか、はずさないうちに、菜切り包丁を取りに行って、そして、やおら自分の道具を掛けて、そうして遊びを始めるわけです。

ところがそういうことをやっているうちにもう本当に競争になってしまいました。ライバルがたくさんでてくる。そこである子どもは考えたのでしょう。「うち、お母さん」って名乗ったんです。「うち、お母さん」って名乗ったら、菜切り包丁は、もうゆうゆうとかばんを掛けに行っても、役割は決っているから、大丈夫なわけです。「あっそうか、〃お母さん〃と言えば菜切り包丁が使えるんだな」と囲りの子はそう感じたのでしょう。そこで次から次と、一番お母さん、二番お母さんと、一つのコーナーにたくさんお母さんができました。お母さんが五、六人いても別に不思議にも思っていません。

ところが途中でお便所にでも行って帰って来たら、ちゃんと第二のお母さんが使っているわけです。なかなか返してほしいといっても返してもらえないわけです。お母さんだから、やはり。

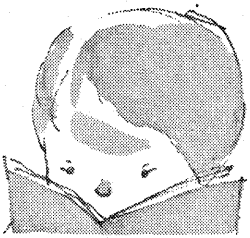
困ったあげく、その次の日になってどうしたかと言いますと、その第一のライバルらしき子どもを、ちゃんと位置づけました。「あんた、お姉さんになり。(なりなさい) うち、お母さん」ってね。お姉さんと、お母さんという区別をはっきりこしらえておけば、別に、お便所に行って帰ってきても、「お母さんよ」と言って包丁をとりもどせるわけです。実に、子どもというのはすばらしいなと思ったんです。

そうすると今度は、第一お姉さん、第二お姉さんとたくさんでてきます。しまいには、「あんた赤ちゃんになりなさい」と、赤ちゃんもでてきました。

こういうのを「役割遊び」とよく言いますけれど、よく今まで、ごっこというのは大人の生活を真似しているんで、その真似

しているなかで、家庭の中にはお父さんがあり、お母さんがあるということから、役割が出てくるんだと、考えていたんです。でも、そうじゃなくて、自分の一つの遊びの位置づけと言いますか、自分の足場を固めるために、その相手を自分とはっきり区別して位置づけていくとこに関連して役割が理解されていくということがわかって来ました。

したがって役割あそびというとき単に社会事象の認識としての役割としての役割理解のみでなく、こうした子どもたちの人間関係が根強くその背景にあること、しかも秩序づくりを学んでいくことがこの経験最中にあることをあらためて理解しなければなりません。私はこれは子どもが自然に考えてつくっていく一つの秩序づくりだと思うんです。さっきのブランコの例では、一つのルールという秩序づくりがありましたけれど、今度は役割をお互いがうけもつということによって秩序づくりを学んでいくこと、つまり子どもたちが自他の区別をはっきりさせながら位置づいて相互に自己主張をやり、自己実現をしながら、他人の自己実現をも認めようとしていっているわけです。それは本当にすばらしいことだと思います。これは、大人が子どもの時に経験したことかもしれませんが大人にはとっても真似できないことを幼児たちは堂々とやってのけているわけです。こんな事例があちこちにたくさんみられます。



（大津市教育研究所）

—つづく—


幼児の教育　第七十三巻　第三号

三月号　©　定価一七〇円

昭和四十九年二月二十五日印刷
昭和四十九年三月　一　日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

# 卒園記念に最適です!!

## フジックス
# OHP700

本体 ―――――――― 63,000円
別売付属品
フジックスロールキャリア ―― 4,900円
フジックスプロジェクションランプ 3,500円

《仕様》

| | |
|---|---|
| レンズ | f=350mm 2枚構成 |
| 投影距離 | 1.5m～3.0m |
| 電源コード | 本体固定式長さ5m コードポケットに収納 |
| 寸法・重量 | 360×310×560(映写時740)mm・9kg |

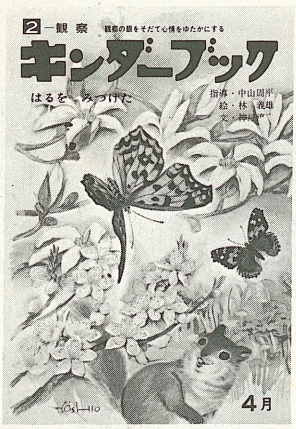
《教育的特性》

- 明かるい部屋で、鮮明に投映できます。
- 近距離から大きな映像が得られます。
- 説明者は学習者と向かいあって、資料を提示できます。
- 学習のねらいに即したＴＰの自作が容易です。
- 操作がきわめて簡単です。

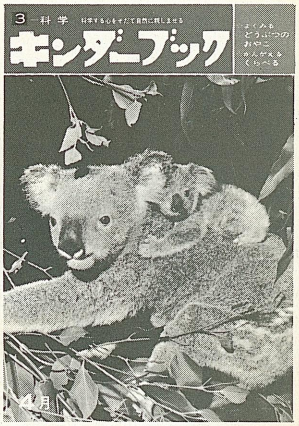
株式会社 フレーベル館

# お子さまの成長に合わせて お選びください

情操をゆたかにし 創造力をのばす
**キンダーブック 1ー情操**
**4月号**“こいぬの　ろくちゃん”




観察の眼をそだて心情をゆたかにする
**キンダーブック 2ー観察**
**4月号**“はるを　みつけた”




科学する心をそだて自然に親しませる
**キンダーブック 3ー科学**
**4月号**“どうぶつのおやこ”“くらべる”

幼児の心を育てる
**キンダーおはなしえほん**
**4月号**“五つの　はなのえき”

**4月号**
**月刊5誌**

園児をもつ母親のための専門誌
**ホームキンダー**

**フレーベル館**

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 TEL 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。